

「笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール 2014」日本招聘 訪日感想文



目次

1. 「笹川杯全国大学日本知識大会」訪日団

北京大学対外交流センタープロジェクトコーディネーター 劉 曉娜 (団長)	2
北京大学外国語学院日本語学部修士課程 2 年 焦 博	4
華中師範大学外国語学院日本語学部 4 年 張 佳鳳	6
南京工業大学外国語学院日本語学部 4 年 謝 倩冰	8
黄冈師範学院外国語学院日本語科 4 年 申 華	13
東華大学外国語学院大学院外国語言語学と応用言語学大学院1年 馬羽潔	15
閩南師範大学外国語学院日本語学部3年 劉 夢思	15
清華大学機械工学院精密機械学部 2 年 宋 昆	16
南京工業大学外国語学院日本語学部 3 年生 向 家瑶	17
北京大学外国語学院日本語学部博士課程 1 年 暴 鳳明	18
北京理工大学外国語学院日本語言語文学科 4 年 徐 愷	18
南京工業大学外国語学院日本語学部 4 年 周 倩	19
北京大学元培学院外国語言語と外国歴史専攻 4 年 張 雪禾	20
北京大学外国語学院日本語学部 4 年 徐 涵	21
清華大学理学院数学学部修士 2 年 王 興飛	21
清華大学社会科学学院心理学専攻 2 年 于 馨	22

2. 「笹川杯作文コンクール」訪日団

人民中国雜誌社事業部部長 孫 立成 (団長)	30
黄冈師範学院外国語学院日本語科 4 年 章 嬌嬌	31
南京郵電大学外国語学院日本語科 4 年 曾 帥帥	32

「笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール 2014」訪日団感想文

1. 「笹川杯全国大学日本知識大会」訪日団

訪日団長/

北京大学対外交流センタープロジェクトコーディネーター 劉曉娜（原文中国語）



時間が慌ただしく過ぎ、厳冬の肌寒い11月に「2014年笹川杯大学生日本知識クイズ大会」が北京大学で開催されたことをまだはっきり覚えています。私は喜んでこの大会の準備過程に参加し、中国の優秀な大学生たち十数人が才能を発揮するのを目にしました。日本財団の特別賛助、日本科学協会の招待のもと、優勝者は2月に日本への旅行学習ができるとあり、授賞式の打ち解けて盛り上がった雰囲気は冬でも濃厚なぬくもりを感じさせてくれました。

大会が終わって間もなく、大学から委託を受け、光栄にも今回の中国青年訪日代表団の団長を担当することになりました。対外交流センターの指導部と日本語学科の指導部はたいへん今回の日本訪問イベントを重視しており、北京大学代表は出発前に多くの支持を受けています。

初春の時節、喜びを胸に、作文コンクールの孫立成団長および2人の受賞者と一緒に、一行19人は日本訪問の旅に足を踏み入れました。北京から成田に向かう機中で隣に座った日本の少年は、たくさん描き込まれた中国語の学習ノートを真剣に繰り返しめくっては黙読し、またたびたび『中国の伝統文化』という本を読んでいた。全く知らない子ですが、好奇心から声を掛けてみて、中国での学習で感じていることや中国各都市の印象を聞くと、彼は喜んで日本でよく使われる生活用語をいくつか教えてくれました。こうした無意識に形成される交流は友好的で誠実なものです。代表団が日本滞在中にさまざまな日本の友人と交流することへの期待もいっぱいになりました。

初めての成田空港ではしとしとと小雨が降っていて、天気は温和で心地良く、日本科学協会の顧文君先生とガイドの坂下さんが到着待合ロビーで出迎えてくれました。顧先生はまた一人一人の団員のために好きな飲み物を買ってくれました。こうした細やかな親切は日本での8日間ずっと味わうことができずばらしいひとときになりました。顧先生、吉田さん、宮内さんに道中の付き添いと配慮を頂き、一刻も休まず東京から沖縄へ、また大阪、神戸、京都を訪ね、学生各位と私は街ごとに深く素晴らしい印象を記憶に残しました。

* 続ける力

1. 尾形理事長は30年余り中日友好事業に従事し続けておられ、世界平和が理事長の求める目標であることは多くの報道が伝えていますが、彼は特に日中両国の安定と友好を重視しておられ、北京大学とは20年余りの長い付き合いです。尾形理事長は2月26日の歓迎晩餐会で、中国青年代表団には今回の訪日期間に思いきり日本を感じて、いいところもそうでないところも心と目と耳で自ら感じ、そして中国の友人達に本当の日本のあれこれを伝えてほしいと希望されました。

2. 2月28日の晩、日本科学協会の大島美恵子会長と彼女の古くからの友人、加藤さんがホテル日航東京の西洋料理レストランで団員達の歓迎会を開いてくださいました。きらめく東京タワーとレインボーブリッジが入り乱れて輝く下、会長と学生たちが自由に話し合い、にぎやかな談笑とむつまじく友好的な雰囲気は長く心を包んでいました。大島会長は特に北京大学がこの1年、日本知識クイズ大会のために行った努力に対して心からの感謝を述べられました。ここ数年ずっと中日友好交流事業に従事していて難題にぶつかったことも多いでしょうと伺うと、彼女はしばし思案してから、活動の展開に多少は政策性の影響を受けるときもあるが、日本科学協会が中日友好交流事業のために行う努力は揺らがないとの答えでした。まさにこうした姿勢あってこそ、「2014年笹川杯大学生日本知識クイズ大会」が十年も続き、訪問団がこうして日本のさまざまな友人と交流できる機会もあるのです。

* 綿密な手配

今回の日本訪問イベントについては、日本科学協会の入念な手配に言及しなければなりません。代表団が日本に到着する前に、顧先生、吉田さん、宮内さんなどのスタッフが日本訪問イベントの具体的な日程、注意事項、訪問先の選定について早くから疎通を行ってこちらの意見を求めてくれました。また日本側はハイレベルな対応から斬新なイベント形式まで、団員達にそれぞれの角度から最も早く日本の文化、社会、歴史、民俗などを直接経験させていて、とても代表的な和の風情を探し、ふだん接する機会の少ない事物まで体験させてくれました。

日本科学協会は積極的に日本各地の政府、公使館、公益団体、メディアと連絡をとり、団員達に訪問した日本の友人達の情熱、素朴さを体感させてくれました。たとえば美しい沖縄では、海辺と古跡の魅力を見ただけでなく、沖縄の人々の好きさに深く感化されました。豊見城市では市長が自ら伝統舞踊で歓迎、また市長夫人が団員全員のために心をこめて伝統菓子「サーターアンダーギー」を用意してくださり、心の中まで甘くなりました。沖縄市の桑江朝夫市長は親切に沖縄の特徴的な風土と人情を紹介してくださり、沖縄国際交流協会の陸丹鳳副会長に至っては徹夜して代表団に各国の伝統衣装を準備して、団員達の沖縄の旅を彩っていただきました。

* 思考の衝突

青年は国の未来、文化交流の使者であり、両国民の友好を増す架け橋でもあります。2月27日中日青年座談会での「どのように中日両国のプラスのエネルギーを伝えるか」の双方の熱烈な討論でも、3月2日の沖縄東南植物園での交流会で代表団と現地の大学生と行った対面交流でも、思考の衝突では十分に両国の青年の才気と知恵、友好と風格が見られ、双方の青年が共に両国関係の望ましい発展のために努力すると期待できることは明らかです。

* 心からの感動

日本では一日ごとに新しい発見があって、各業種の日本国民には内心から発せられるほほえみが随所で見られました。印象の最も深いのは深く私の心を打った以下の出来事です。

1. 代表団が2月28日埼玉県新座市にある手塚治虫先生の生前の仕事部屋を見学したとき、松谷孝征代表取締役社長が日本のアニメとマンガの鼻祖である手塚治虫先生の一生の物語と彼のマンガ作品の持っていた人間哲学の思想を紹介してくださり、「生命を尊重しないで精神世界の科学の発展を軽視すれば、必ず人類と地球の滅亡を招く」ため「生命」と「心」を重視するのがマンガの精神であり、後世に対する啓発でもあると強調されていました。手塚先生の下絵の真筆を見ていると、私は学生たちと同じようにとても感慨を覚えました。

2. 3月3日午前、「ひめゆり平和祈念資料館」を訪問したことは、代表団の団員達にとってある時期の歴史を復習する機会となりました。1945年、当地でひどく痛ましい沖縄戦が発生し、きわめて多くの沖縄の平民が死傷しました。沖縄戦では「ひめゆり学徒隊」の少女たちが教師の引率のもと負傷者の救助にあたり、少なからず犠牲者を出しました。同盟軍の空爆を避けるため軍病院が移転したとき「ひめゆり学徒隊」は取り残され、それから200数人の女学生と18人の先生が命を落としてしまったのです。ひめゆりたちの生前の写真とその下の生涯の簡単な紹介に向き合うと、長く落ち着いていることはできませんでした。ちょうど当時の生存者である89歳の謝花澄枝さんがボランティアとして見学者に当時の様子を説明していたところで、私達が中国からの青年代表団であると知った彼女は自らしっかりと私の手を握って、「見学に来てくれてありがとう。心から世界に永遠にもう戦争がないことを望みます」と声を掛けてくれました。この言葉が別れる前に聞いた最も長い言葉です。

3. 3月3日の午後、伊丹空港からバスで神戸の「人と防災未来センター」に向かいました。阪神淡路大震災発生当時の様子を体験し、一同はその時の地震の強烈な破壊力に震撼していました。それから村井雅清さんを訪ね、そのNPOが世界の多数の国家で行った人道支援についての紹介を伺いました。汶川大地震の後に四川で展開したボランティア活動を特別に紹介してくれたことは特筆に値します。私は自ら

その地震を経験していたので、私の郷里で彼が展開してくれたボランティア作業の話を知っていると私は感動する涙が流れ落ちるのを我慢できませんでした。

* サプライズ

1. 注意深い団員が孫立成先生は3月5日に51歳の誕生日を迎えると聞き、そっと私に教えてくれました。日本科学協会の顧先生と相談した結果、日本科学協会が内緒でバースデーケーキを用意し、団員全員でバースデーカードを用意することになりました。3月4日の夜に前倒しで孫先生の誕生日を祝った暖かな時間はきっと一人一人の心の中に残っていくことでしょう。

2. 最後の日、大阪空港で慌ただしくチェックイン手続きをしながら、日本の2人の女の子が別れの挨拶の間に合いませんでしたが、少しして私が場内放送で呼び出されました。桜井穂子さんが私のイメージをもとに徹夜で和服姿の肖像を描き、プレゼントまで用意してくれていて、空港スタッフに手渡してくれたのです。そのとき私は学生たちと同じように感動して幸せでした。

* 感謝と期待

ごく短い8日の貴重な時間、日本で経験した一つ一つはすでに秘蔵の思い出になっています。日本財団の尾形武寿理事長、日本科学協会の大島美恵子会長、顧文君先生、中村常務、吉田さん、宮内さん、そして訪問先の日本友人の親切で周到なもてなしと行き届いた配慮にはたいへん感動しています。同時に、孫立成団長、および愛すべき中国の大学生、日本の大学生の皆さんと一緒に日本でこのようにすばらしい時間を過ごせたことをとてもうれしく思っています。配慮してくれた孫団長、全行程の通訳で日本の各界の友人と順暢に交流させてくれた暴鳳明先生、各地の特徴や物語を解説して訳してくれた顧文君先生に感謝します。

この短い1週間の充実したすばらしい訪問を通じて、はっきりと日本人の情熱、礼儀作法と友好を感じ、日本各地の風土と人情に対していっそう直観的に認識し理解することができました。もちろん「中日問題」には無理解や誤解まで依然としてたくさん存在していることは否定できませんが、希望を抱けば未来があります。中日の青年の間の友好的往来を通じて、互いに心を通わせ、誠意を持って向き合うようになり、中国の青年により多くの「知日派」が、日本の青年にもより多くの「知中派」が現れて、中日関係の明日がよりすばらしいものになると信じております。

北京大学外国語学院日本語学部修士課程2年 焦博（原文中国語）



時間は飛ぶように過ぎてしまいます。気付いたら日本を離れて三日目になっていました。こうした考え方をしていると思い出す足どりも速まります。今回の訪日は単なる観光や買い物ではないため、この感想文も景色の賞賛や中日友好に対する期待に止まるものではありません。訪日団体としては中国の友好的な一面を表現しなければなりません。しかしテレビでは日本の学者が「憲法を改正しなければならない」と言っているような折、こうした民間の友好が日本政府の独断専行する背景の下でいつまで続くか解りません。事実、日本へ出発する前のニュースでは、安倍政権が軍事面で中国に対抗するような行動をとっているという記事がありました。あまりに多くの痛ましい歴史を持つこの国に警備がないとは想像できません。

「中国のテレビではいつでも抗日がテーマのドラマが放送されていてとても不快です」。初日の討論で日本の大学生から出た意見です。また学術的な角度から「中国で起きた揚州地区の大虐殺にははっきりした歴史的根拠がないのに、どうして南京大虐殺には死者三十万人と裏付ける強力なデータが見つかるのでしょうか」と言う人もいました。ここから、歴史問題に言及すると中日の学生の間でも認識の衝突は大きいことが分かります。中国にとって、歴史問題は中日の交流とは切り離せない話題です。友好は過去を忘れる代償にはできません。してしまおうと「友好」が重くなりすぎてしまいます。事実、当時の

痛ましい歴史を振り返るときに中国で行われているのは自身についての反省のほうが多いのです。若き大国があればほど衰弱して一撃にも堪えなくなったのはなぜか、どうして最近までの長い間、抗戦において国民党軍の果たした役割をみとめなかったのか、などです。これらは中国自身と向き合った反省であり、いわゆる「反日」とはかけ離れています。しかしどうも日本から見ると正しい歴史教育は「反日」教育となっているようです。こうした誤解は短期中には解消できないでしょう。むしろ日本政府の中国に対抗する一連の行動は次第に強まってきています。加えて日本メディアの中国に対する報道はとても偏っており、メディアは天下の混乱を望んでいるかのようです。だから反日的で国内状況の望ましくない中国のイメージが日本の民衆に示されているのでしょう。

もちろん現在のこうした望ましくない背景の下でも希望を見出すことはできます。例えば今回の中日青年の交流です。このような交流は誠意を示し、天窓を開け放して明るい話をする交流です。こうした交流を増やさない限り、中日間の友好にプラスの貢献をすることはできません。

しかし、友好が主流という前提を認めた上でも、中国側としては日本に右翼的な政府と民衆の観念を左右するメディアがあるということは片時も忘れられません。こうした現実が遠からぬ将来の友好に差し支えないことを祈るばかりです。

日本の各地を観光していたとき、とても印象に残ったものがいくつかあります。

まず、北京から来た私にとって、青空が見えたことが喜びです。秋と春、北京の空はスモッグに沈んでしまいます。もちろん最近ある程度の改善は見られていますが。沖縄で青い海と青い空を見たとき、このような景色が遠からず中国にも現れるよう望みました。

次に、神保町の書店数は相当なものでした。一件ずつ見て回るには一日かかりそうで、しかもざっと通り過ぎるような観光でしたが。たくさんの全集を目にしたときは買いたいという衝動が起きました。個人的に、日本語ができて読書が好きなら、日本で生活するのが絶対にいいと思います。

他に印象に残ったのは恐らく中国の購買力です。現在は円安で、日本製の商品は中国でも評判がよいため、中国は日本の店舗がもっとも歓迎すべきお客のようになっていきます。中国の観光客がずさまじく買い求めるため供給が追いつかない商品もたくさんあります。今の中国人が日本で買うものは数十年前のものとは違いがあります。昔はテレビや洗濯機などの大型家電を競って買い求めていましたが、今は炊飯器などの小型商品です。しかし時代の変化につれ購入する物品もだいたい変わるものです。この現象は生活の質を絶えず追求し向上させたいという人々の態度を示しています。

メイドインチャイナが世界中を覆っていますが、中国人そのものから認められるにはまだ一定の時間がかかりそうです。国の榮譽はもしかすると外国の人に自信を持って「これは自国の製品です」と勧められるような簡単な言葉に出てくるのかもしれませんが。中国製品は遠い国まで普及しており、中国製品がなければ正常な生活を送れないところさえあるというのに、製品に対する信頼にはまだかなり不足があります。しかしこれも通らねばならない道なのかもしれません。歴史上、ドイツ製も日本製も当初は安かろう悪かろうの代名詞でした。遠からぬ将来、中国人が外国人にもものを勧めるときにも、李克強総理が高速鉄道を勧めたときのように自信を持てるようになるだろうと信じています。中国は大型のタービンエンジン、高速鉄道から小さいボタンまで生産できる国なので、中国にもっとハイアール、シャオミ、ZTN、ファーウェイのような企業、特に人々の生活と関わりの深いものを生産する企業があつたら、中国は今よりもっと強大になれるはずで。

また、毎日のように地下鉄を使っている私にとって、東京の地下鉄は本当に褒められたものではありません。中国のネットで多くの人が東京の地下鉄は先進的で速いと言っている理由が分かりません。神保町へ向かう道中「先進性」も「便利さ」もまったく感じられませんでした。とても低い天井に狭いホームでホームドアもなく、迷宮のような乗り換え。地下鉄入口の設計から見ると、大雨のときはホームに水が入ってしまいそうでした。どうしてか、こういう見聞を中国の人に話すとあまり信じてもらえません。まさか中国よりひどいのかと不思議そうな顔をされるのです。中国は健全な工業体制を持つ国であり、穏健で速い経済成長をしている国でもあります。そういう国が作る地下鉄であればそれほど劣る

はずはないと信じています。しかし中国のネット上には神話化されたような隣人の話がでできます。二十数年前に出回っていた、日本の小さい子供が体重の半分もある荷物を背負って一日百キロも移動していたというような話です。もちろんそんなものは日本のメディアには見られません。また、中国が多くの方で日本の先進的な面を学ぼうとしていること（多少の誇張をしているときもありますが）も見られず、中国の「反日」しか目にできないのです。翻って中国のメディア、特にネットメディアでは基本的に全力で日本を賞賛しています。東日本大震災のとき、日本のボランティアや自衛隊などが救援にかけつけていなかったときでさえ、ネット上には「この素養を見よ、なんという我慢強さだ」といった話が出ていました。一番おかしいのは最近 Wechat でシェアされた日本最低の学生寮を紹介すると称する文章です。写真を見るだけで確かにとてもひどく、台所もトイレもほぼ掃除されていない様子で、正常な人なら住もうとはしないだろうという感じでした。それでもその文章は賛辞であふれていたのです。散らかっていてトイレが男女共用の物件でも慣れれば快適なもので、日本人は画一的に揃っており、夜に楽器の練習をしているとうるさいのに文句も出ない……住めば解ると。しかし、こうした外国に対する賞賛は中国人の学習であり、自分を変える力であり、最終的には私達の追いつき追いつき踏み台になります。

わずか一週間のうちに日本のさまざまな人々に会いました。交流はやはりとても重要です。中日両国で幅広い民間交流ができたなら、より多くの日本の友人が中国の美しい土地を見に訪れてくれたら、最終的には両国の今の双方に対する印象や考えは変わるでしょう。

華中師範大学日本語学部 4 年生 張佳鳳（原文中国語）



3月という初春は彩り豊かな風が心地よく、朝日とたそがれが頬を染める中、みんなと過ごした暖かなひとときは、写真に収まって私の新たな出発のパートナーとなっています。時間が経つにつれ離れていってしまうのではなく、いつかきっと再会できると思っています。出会った人々の名前は一人一人はしっかりと覚えています。

今回の旅の最も大きな意義は自分の魂との対話でした。心身を整えるとともに最初の本心を見つけ、前へ進む活力を得ることができたのです。あつという間の8日間でしたが、毎日のように新たな収穫があり、日に日に日本の民族への敬意と好意が増したと感じています。あまり客観的ではないかもしれませんが、毎日プラスのエネルギーを吸収できたことは間違いありません。もしかすると日本の「おもてなし」精神の力なのでしょうか。

本来なら日本語でこの気持ちを伝えるべきところですが、まだ自分の日本語力でははっきりとしたこの感覚を伝えられないことはよくよく分かっているので、中国語でさらりと書かせていただきます。皆くさんの紙幣が貼られたさん、この8日間で出会い共に過ごした皆さんと、この8日間で経験したことを文字に起こして形にすることで、成長の糧にしたいと思います。ただただ皆さんにお会いできてほんとうによかった。内心からわき上がる感動を吐き出すと感謝の一言です。

2.26-2.28 東京

日本に到着した日は天気がいまいちでしたが、内心の期待と興奮は少しもそんな影響を受けませんでした。日本を訪れたのは今回が初めてです。初めてのことはいつも興味のあることに満ちあふれています。夢やテレビで見たところが実際に目の前に広がっている不思議さは言葉にできないものでした。『紅樓夢』で田舎住まいのお婆さん劉姥姥が名園の大観園を初めて見たときのシーンを彷彿とさせます。実物が想像していたものと同じかどうか、検証したくてたまらなかったあの感覚。

移動中、東京のあるごみ処理場の説明を受けました。可燃物と不燃物を分別することでごみを発電や道路の建設などに活かしているとのことで、ごみを宝に変えるという環境保全の実践に頭が下がりました。理想的な環境品質のために官民の両方が努力しているのですね。

日本で体験したさまざまな細かい工夫にも確かに驚き感動しました。ホテルの浴室でシャワーを済ま

せると、もうもうと湯気が立ちこめた室内で鏡が一箇所だけ曇っていないことに気付き不思議に思いました。よく調べてみると水滴の付いていない箇所は発熱しているため結露していないのです。利用者の便宜を考えてこれほど細かいところまで目が届くとは、本当に敬服し感動しました。

東京での2日目は日差しもありました。朝日を浴びながら道を急ぐホワイトカラーの人の群れに着いて歩き「通勤」を体験しました。誰もが慌ただしく歩いていながら、きちんと秩序を守っているのです。彼らにとっては全く当然のことなのでしょうが私には目新しい風景に映ります。こうしたリズムこそ、この街が発展し続ける動力なのでしょう。

中日若者討論会では、少し人見知らずな自分はやはり緊張しました。しかし日本の若いパートナーたちは親切に討論を準備していました。驚いたのは必要ないときまで彼らが敬語を使っていたことで、変わらない態度にかえて親近感を覚えました。彼らは、率直かつ誠実で、自分の考えを上品に共有していました。それまで多くの日本人は「建前」ばかり口にして「本音」を出さないとばかり思っていたのですが、こういう先入観はよくないと感じました。心ゆくまで心おきなく話すうちに考え、考えるうち感慨を覚えたのはそもそも一人一人が独特な考え方を持っているということで、ものの考え方が広がりました。この討論が中日の友好のために何が貢献できるとは言えませんが、少なくとも私たちはみんな関心を持って心配しており、少なくとも私たちは自分から始められます。自分が感じた善し悪しを身近な人に伝え、教科書、映像作品、報道で作られた固定観念から抜け出すのです。関心を持って理解するのが友好の第一歩です。討論会と午後の東京観光からは大いに得られるものがありました。視野を広げることができ、日本の流行文化を体験できただけでなく、何より貴重な収穫は異国の親友ができたことです。

感動して心温まるひとときもありました。ビックカメラで受けたサービスに改めてこの国の好意を感じ、敬意を覚えました。その時はすでに閉店する時間でしたが、免税品の会計には長蛇の列がまだ続いていました。すると店員さんは閉店時刻にもかかわらず、厭な顔一つしないで親切に対応してくれたのです。最後には駅の最寄り出口を教えてくれたばかりか、地図を手にも方向を確認しながらエレベーターまで送ってくれました。日本が買い物天国だというのは、品質が高い品物を買えるというだけでは決してなく、こうして優れたサービス、人間味あふれる接客とサービスを受けられることがより重要なのだと感慨を覚えました。

東京の最終日も晴天が続き、心も少しずつ感動で温まってきました。

幸運にも手塚治虫先生の生前の仕事場を見学できる第一陣に入ることができ、アニメやマンガはよく知らなかったのですが、一作品を作り上げるためのチーム全体の努力には感動を覚えました。一生自分の好きなマンガの仕事に従事でき、かつ苦難に遭っても死ぬまで変えずに通して、戦後の日本人のために精神力を使った手塚先生は尊敬できて敬服できる人です。プロダクションのスタッフの話にあっており、先生は永遠に心の中で生きています。

初めて体験した日本の温泉文化でも、温泉より心遣いに心が温まりました。日本市民の細心のエチケットに深く感動したのです。日本人はできるだけ他人に迷惑をかけない民族でエチケットやマナーには細かいとは以前から見聞きしていたものの、実際に味わうとやはり感動を抑えきれません。更衣室のロッカーで、自分がある母娘のロッカーの前を塞いでしまっていることに全く気付いていなかったのですが、二人は私の後ろでおとなしくこやかに場所が空くのを待っていたのです。それに気付いてすぐ私も横へどけましたが、自分の失礼さと気の回らなさに恥ずかしくなりました。彼女たちの善意と素養に感動し、こうした暖かな善良さを持つ民族に感動しました。

歓迎会の時、窓の外に広がるお台場の夜景があまりに立派なのを見て、日本人の「やさしさ」のように美しくきらきらと光っているのだと気付きました。

3.1-3.3 沖縄

美しい青空と青い海、親切な市長と市民、夜は静かな大通り。小さい島には強大な求心力があり、一

一人一人が一致団結して共に街のために努力していました。質素ですばらしい街です。思わず晩年はここに定住しなければと考えてしまいました。

最も印象に残ったのは沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリーの見学で耳にした話です。壁に名前のサインされたドル札がたくさん貼られていたのですが、説明係の人によるとベトナム戦争の時、沖縄に駐留していた米軍が最前線に向かうというとき自分の名前をドル札に書いて沖縄のバーの壁に貼り、無事に戻れたらその札で酒代を払おうとしたものだそうです。しかし戦争は終わっても、壁にこれだけままとすることは、大多数の人が戻ってこられなかったということです。戦争は残酷で、歴史の痛みを覚えておかないと、同じ失敗の繰り返しを免れることはできません。改めて、平和な時代に生まれたことがどれほど幸運なのかと感じました。そして平和は私たちが共に守っていく必要があります。ひめゆり平和祈念資料館では記録映像を見学し振り返る日記を拝読しました。ここでも戦争の残酷さを感じ、気持ちももとりわけ重くなりました。国のために命を捧げた少女は美しいユリのように沖縄そして世界の人々の心の中で変わることなく咲き誇ることでしょう。戦争のない世界と永遠の平和を願います。

3.3-3.4 大阪、京都

実は阪神淡路大震災 15 周年映画『神戸新聞の七日間』を見たことはありました。そのときは新聞が客観的に事実を報道するだけでなく、困難の中にいる人々に希望や安らぎを届けることにも責任を持っていたことに感動しました。今回「人と防災未来センター」を見学して自然災害の無情さを改めて感じ、何度も目が潤みました。改めて日本の危機意識と防災・減災の取り組みに深く敬服を感じています。NGO の村井雅清先生が長年されてきたボランティア活動にも感動し敬服しました。一人一人が「負けないぞ」という気持ちで周りの人と助け合い、くじけず生きていくべきなのだと思います。

京都の古刹、清水寺と金閣寺の見学は駆け足だったので少し悔いが残りました。次の機会に見直すのもっと面白いだろうと思います。また来たいという衝動を起こさせる場所でした。いつか自分も和服をまとしてここを訪ね、清水寺の外の小径を優雅にそぞろ歩いて、じっくりと伝統の魅力と深みを味わえたらと待ち望んでいます。

旅行中はとても充実していて、時間が飛ぶように過ぎてしまいました。別れは間違いなくつらいものであり名残惜しいものです。疲れきっていますが、まだこうしてみんなと歩き続けていくことを期待しています。

いっしょに過ごしてきて、内心の感謝と感動は一言では言い尽くせません。特に日本科学協会の顧先生、吉田さん、宮内さん、中村先生、そして日本側パートナーの桜井さんと諏訪園にはこの訪日旅行のため苦勞を重ね、自分の休み時間をかなり犠牲にしながら、十分に真心のこもった「おもてなし」をしていただき、心から感謝しています。

俗世間ではただ歳月が静かに過ぎることを願い、あちらでは花が咲きこちらでは草が茂る、どちらの世界もこのとおりの大事にします。それから、いつか、再会できることを願って。

南京工業大学外国語学院日本語学部 4 年 謝情水（抜粋/原文中国語）



長雨の続く成田空港に着陸するまで、自分のチームが今回「笹川杯」で 3 等賞をもらったのはすばらしい幻覚だと感じていました。空港に着いて最初に目に入ったのは、東京旅行のガイドを務める坂下さんが「笹川杯」の文字が刷られたカードを掲げる姿でした。坂下さんの先導で北京発の分隊が待っているところへ行くと、日本科学協会の顧先生が飲み物を買いに連れていかれました（宿泊先までが遠いため、先生は喉が渇かないか心配してくれたのです。先生はこういう細かいところで気遣ってくださって、その親切さに感動しました）。全員が揃うのを待って宿泊先に向かいました。出会ったばかりで誰も良くわからないので、道中、坂下さんから道中のさまざまな場所や建物の紹介を聞きながら、みんなと楽しく付き合うにはどうするかと考えていました。本当のところ、最初は

本当に少しびくびくしていたのですが、その後そんな心配はまったく要らないと証明されました。担当の先生が皆さんとても気さくで、同行する同級生達もみんなとても積極的だったので、2日もかからず馴染んでしまいました（笑）。

Day1

ホテルに着いた後は荷物を整頓して、少し休憩してから「禅」と言う日本料理店に向かいました。しゃぶしゃぶのお店ですが、何と牛肉は近江牛でした。今晚は日本財団が私達のために開いてくれた歓迎会で、日本でこんなに良い口当りの肉を食べたのは初めてです。なので、むだ飯食いの胃を満足させてくれた財団の各位には本当に特に感謝しています（笑）。食べ終わると、少し梅酒を飲んだせいかほろ酔い気分になりました。しかし外のひんやりとした風に当たると、言葉にならない心地良さでした。ホテルに帰ると、まだ時間がとても早いと感じ、買い物をしたいという欲がわき上がってきたので、中村常務の案内でドラッグストアに走りました。中村常務には、どうしても感謝を申し上げなければなりません。その日は中村常務は風邪で声が出ないほど喉を痛めているようでしたが、それでも親切にドラッグストアへ連れて行ってくださいました。しかも心配そうにずっとお店の外で待っていてくれました。雨が降っていたので外は肌寒く、風邪を引いた人が外で立っているのは大変です。そこで先に戻ってもらおうとしましたが、それでも心配だったらしく、後で引率の先生から無事ホテルに戻ったか確認されました。その後のイベントで中村常務とご一緒する時間は余りありませんでしたが、ずっと気に掛けてくれていて、最終日にはサプライズ（後で紹介します）まで用意してくれた本当に「やさしい」おじさんでした。

Day2

日本で初めての朝を迎えました。中国で見えていた天気予報には行程全体が曇りか雨だったので少しがっかりしていました。加えて前の晩にも雨が降っていたので、快適なベッドを離れたくない気分になっていました。ところが窓を開けると一筋の光が差し込んできたのです。その瞬間、望外の喜びとなりました。天気は本当に今回の日程に親切だと思いました（それから沖縄と関西に行ったときもそうだったという事実が証明しています）。朝食はビュッフェだったので、迷わず半年ぶりの納豆を選びました（その味が本当に懐かしくて）。

朝食が終わると階下で集まり、日本財団ビルの「日中若者討論会」に向かいました。私達のチームは中国の女子学生3人と日本の男子学生3人で、始まった当初は堅苦しさもありましたが、自己紹介とウォーミングアップの討論をすると、次第に活発な雰囲気となりました。今回の主な討論は、中日関係が緊張している現在の大きな背景の下で、若者がどのようにして中日関係の発展のために貢献するかについてでした。討論の後、5分間の概要発表がありました。今回の討論会にはラジオ局と新聞の記者も参加しており、会場には多くのビデオカメラやマイクがあり、本当に少し緊張しました（笑）。討論会が終わった後、私達のチームは中村常務にお願いして記念写真を撮ってもらいました。午後は日本の学生パートナーの案内で慶応義塾と東京タワーを見学しました。慶応義塾で最も印象に残ったのは地上6階地下5階の建物です。新しい大学図書館で、視聴覚室と自習室も備わっていました。中はとても静かだったので、入る時はほとんど息を止めたような状態で、真剣に自習している学生達の邪魔にならないようにとても気をつけました。それから東京タワーに行きました。東京タワーに行ったのは二度目です。それまでどこからでもその「強敵」、スカイツリーが見えていました。今回、東京タワーに上って眺めても、スカイツリーは見えました。遠くに沈む夕日や雲の中に見え隠れする富士山も見ることができました。東京タワーを下りた頃には夜になっていました。東京タワーのライトアップもされていたので、日本科学協会が歓迎会を開いてくれる場所へ駆けつけました。夕飯もビュッフェでした。この時、チームごとに各自の午後の日程を報告しましたが、みんな収穫が多かったようです。

Day3

埼玉県新座市にある手塚治虫先生の仕事部屋に行きました。彼の生前最後の仕事部屋です。一般人が見学するのは難しいところだそうで、今回は本当に幸運でした。仕事部屋と同じフロアにある他の絵師

の仕事部屋（すべて使用中）も合わせて見学しましたが、以前自分で絵を描いていたときと同じ道具やとてもあこがれていた道具を目にした瞬間、懐かしさを覚えました。また幸運にも手塚先生の下絵の真筆を見ることができ、内心ではずっと自分も今までずっと絵を描き続けていたら手塚先生のようになれたらどうかと感嘆していました。そしてスタッフからアトムの壁掛けカレンダーとステッカーももらいました（よくできていますが勿体なくて使えません）。お昼に日本料理の定食を食べてから、お台場へ出かけました。大江戸温泉物語は古色ただよっていて、聞くところによるとたいへん江戸の時代の風情があるそうです。しかし自分は切実に買い物が出たかったので近隣の超大型ショッピングセンターに行ってしまう、伝統的な温泉の風情を感じられなかったのは少し残念に思います。

夜はお台場のホテルで地中海料理を食べ、大島会長にお会いしました。北京でのクイズ大会で会長のお話を聞いていたのは舞台の下でしたが、今回は対面しての交流です。大島会長はとても親切で優雅な女性で、今回はご友人の加藤さんもいらっしゃいました。長いダイニングテーブルの横は足下までガラス張りだったので、ご馳走を楽しみながらお台場近辺の夜景を眺め、本当にとってもロマンチックでした。

東京での3日間の日程はこのように終わりました。当初、今回の日本旅行はとても厳粛な環境で行われるはずだと思っていました。しかし本当に体験してから気付いたのですが、担当の吉田さん、宮内さん、そして顧先生、中村常務はとても親切で、私たちのパートナーのように進んで交流をもってくれました。さらに日本の学生パートナーも東京見学のためにかなりの時間を割いてくれたので、見学の間ずっとリラックスして楽しむことができました。

日本の学生との討論会をするまでずっと、日本の大学生は中国をあまり好きでないと感じていましたが、しかし討論していて自分の考えがとても一方的だったことに気付きました。例えば、同じチームだった倉沢君は東京大学で中国思想を学んでおり、山田君は三国志がとても好きだそうです。しかも彼らは自分が好きなことについて中国の大学生より詳しいところさえあり、たいへん感心しました。討論会はすでに終わりましたが、それでも考えて続けています。中日両国がずっとこうした微妙な関係にあるのは、お互いを知る過程に先入観があるせいで、チームでの討論中に石井君が話していたように、一部の人は、相手の国に一度も行ったことがなく、一度も相手の国の人と接したことがないのに、いわゆる好き嫌いがあるのはどうしてなのでしょう。ですから、私たちはそうした先入観を取り払って少しずつ相手との接触を試み、本当に体験してから結論を出しても遅くはないはずです。確かに上の世代の思想は少し頑固なところがありますが、私たち自身は変われます。自分たちの見聞きしたことを彼らに教えると同時に下の世代にも伝えていけます。実は中日両国はどちらもやや内気な国です。もしもどちらかが思い切って相手のその領域を理解する1歩を踏み出せば、両国の関係はとて大きく改善できるかもしれませぬ。そしてその重要な積極的な1歩は、政府にばかり頼らず、若者である私達が努力して踏み出すべきです。今回のイベントの中で、私達の引率者を務めた北京大学の劉先生はずっと「プラスのエネルギー」という言葉を強調していましたが、この微妙な時期の中日に必要なのはまさにこのみなぎるプラスのエネルギーです。

今回の東京の日程では、ガイドの坂下さんにも特に感謝しています。彼女はこれから行くところについて細かく解説してくれましたし、彼女のおかげで私は初めて東京で富士山を見ることができたのです（それまで日本に来たときは見られませんでした）。

Day4

早朝から空港に向かったのは帰国するためではなくて、かねてからあこがれていた沖縄に行くためです。当日の沖縄はかすかに雨が降っていましたが、飛行機から見える景色の美しさには少しも影響しませんでした。

沖縄に到着後はガイドの三国さんの案内で首里城を見学しました。三国先生さんは生まれも育ちも沖縄の人のはずです。環境と海洋の保護をテーマとするタイプのツアーを主に組んでいるそうです。出会

ってすぐに沖縄言葉で話しかけてくれて、聞き取れませんでした。耳当りは良く感じました。首里城を見学してから向かったのは宿泊先に近い大型ショッピングセンターです。大型ショッピングセンターには大きな広場があり、上には「朋遠方より来る有り」の横断幕がかかっています。沖縄の人々による日本舞踊と琉球舞踊を觀賞した後、私たちも舞台上がって歌を歌いました。また当地の伝統舞踊「カチャーシー」もみんなで踊りました。夕食はホテルの階下で沖縄の住人といっしょに食べました。豊見城市長夫人お手製の黒糖味「サーターアンダーギー」も頂きました。相席になったのは沖縄に定住する中国人3人でした。皆さんとても若く健康そうでした。彼らの話では沖縄はとても住みやすく、生活リズムもさほど速くないようで、誰もがとても親切で分け隔てなく、住めば住むほど好きになるとのことでした。その話を聞いた瞬間、沖縄の親切さを感じました。

夕食では沖縄特産の泡盛（中国の白酒に少し似ていました）を味わっただけでなく、ゴーヤーとスパムのパスタも食べました。向かいに座っていたおじさんによると、ゴーヤーは沖縄特産でスパム料理も沖縄独特ですが、米軍が沖縄に持ち込んだ習慣だそうです。

沖縄に滞在した2日間、日本の本土とは違う沖縄独特の文化の息づかいを感じました。単なる島の文化というだけでなく、米国や中国の文化とも融合しているのです（沖縄住民のかなりの部分が中国の福建沿海の一角にルーツを持っています）。このとても魅力のある文化にはとても惹きつけられました。

Day5

朝に沖縄市長と対面し、その後はガイドの林先生の案内で勝連城に行きました。実は勝連城はただの旧跡で、どう見ても荒れ果てた家でしたが、でこぼこな山道を登ると目の前がぱっと開けました。城の最高地点から海全体を眺めることができました。

前にも書いたように、天気は本当に親切でした。陽光が照らすと海の青が違う色を見せたのです。そして底が見えるほど透明でした。これほど美しい海を見たのは初めてで、飛び込んで泳ぎたいと本当に思いましたが、今は海水温がまだ低く泳げないと林先生に聞きました。もう少し「海開き」まで待てば泳げるようになるそうです。ちなみに沖縄での遊泳可能期間は4月1日から10月31日までだそうです。沖縄本島そのものがサンゴ島のため、前日に見学した首里城とこの日見学した勝連城にも、一部サンゴの岩で作られた部分がありました（特に勝連城の遺跡はほとんどすべてがサンゴの岩）。また海辺にはサンゴの骨格がたくさんあり、記念として自由に拾うことができました。

昼食の前にはマグロの解体ショーを觀賞しました。ある友人によると、東京でこれを見たいときは早朝に築地市場へ行かなければいけないそうです。今回の日本側の先生方がここまで周到に手配して沖縄で見せてくれるとは予想外でしたし、早起きの必要もありませんでした（笑）。刺身はどうにも食べられません。シェフが熟練の手さばきでマグロを解体するのを見るのは興味津々でした（笑）。午後には浴衣を体験し、遠くからアメリカ空軍の沖縄基地を眺めました。

夜には東南植物楽園で沖縄市民との交流会があり、大部分は沖縄国際大学の学生でした。お互いに情報交換をしあってとても面白いひとときでした。

Day6

この日は涙を流す旅だったと言えます。

午前中は「ひめゆり平和祈念資料館」を見学しました。林先生からその年この一帯で起きたことの解説を聞きながら見学していると、ずっと涙を堪えられませんでした。米軍の沖縄上陸作戦のとき、沖縄の民衆は次々と反撃にかり出されました。ちょうど祈念館の表門に入ったところが当時の女学生達と先生の防空壕の遺跡です。生存者がこの戦争を振り返るビデオを見て、当時の学生達たちが負傷者を手当する姿と身につけていた物品、彼らの写真も見ました。動員されたとき、女学生たちはその戦争がすぐ終わると思っていたはず。だから鏡や傘、教科書まで持っていったのでしょう。彼女たちは自分が忙しく眠る気力さえなくなるとは思い付かなかったでしょう。彼女たちの中の大部分は永遠にそういったものを使うことさえできなかったのです。当時は大多数の女学生が敵軍の進行を食い止めるためにその命を落としています。「慰霊の壁」には当時動員された学生と教員のほぼ全員の写真が掛けてあり（一

部の学生は名前のみで写真がありませんでしたが)、その下に名前が記されていました。別の大きな部屋には、彼らの写真と名前だけでなく生前の概況と正確や日常生活についての記述までありました。紹介の詳しさに、この少女たちが本当にそばにいるような感じがしました。展示されていた戦争の遺物の中には持ち主が分からないものもいくつかありました。こうした若い命が今でも人々の心に刻まれていることが、せめてもの慰めに思えます。

午後には沖縄を飛び立ち、大阪へ向かいました。空港からはバスで神戸の「人と防災未来センター」に行き、とても恐ろしい阪神淡路大震災の様子を体験しました。それまではテレビで地震についての報道を見たことと、いかに怖いかは聞いたことがある程度でした。ですが、今回の体験で、本当にその感覚を感じることができたと思います。災害はわずか十数秒のうちに起き、そのたった十数秒で何もかも壊す力があります。たくさんの建物がほとんど一瞬の間にどかんと倒壊して廃墟になり、反応する時間さえありません。しかも地震の後には火災が伴い、沿海地区にはさらに津波のような二次的災害もあります。地震のような災難では身内を失った人も多く、災難に対する傷、PTSD も残っています。これらはすべて経験したことがないので、ただメディアで述べられるだけで実感はできません。災害の深い痛みを経験すると同時に、助け合いの力と温かみも感じました。ここでまず「人と防災未来センター」の見学後に訪問した井村先生について紹介しておきます。先生と彼の NPO は世界の多くの国に駆けつけて人道支援を行ってききましたが、汶川地震のとき四川省でボランティア活動をされたこともあり、この先生はとても尊敬しています。災害時の人と人との助け合いのほかにも、日本の専門家がふだんから建物の構造と計画に盛り込んでいる工夫にも感心しました。当然、それまでの痛ましい経験と教訓から吸収されたものです。

今年で阪神淡路大震災から 20 年。神戸に「パイ山」と呼ばれるところがあるのは以前テレビで見たことがあります。今はただの待ち合わせ場所ですが、震災で命を落とした人たちを記念する場所だそうです。震災で路頭に迷ったおばあさん取材している番組もありました。そのおばあさんは近くでパイ山を通る人たちを見つめており、たまに歌う芸人がそのそばで歌を披露すると彼女は静かに聞いていました。震災後、最初はとてもつらかったが、若い人たちを見ていると自分にも生きていく力があるような気がしたと彼女は話しています。また韓国から来たという若者は、ガールフレンドを記念するためわざわざ訪れたそうです。今回は神戸市内の見学がなくパイ山にも行きませんでした。きっと記憶に残すべきことは永遠に忘れられずにいると信じています。

沖縄での 2 日半と神戸での半日で最も印象に残ったのは災害と平和というテーマについてでした。神戸の「人と防災未来センター」では天災の恐ろしさを体験し、沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」では人災の凄惨さを感じました。誰もが平和にあこがれており、天災は避けられないことですが、自然災害の予防と対策の過程で絶えず整備が進みある体制が作られてきました。例えば私は前に三重県津市に住んでいたのですが、私達の学校のそばは海でした。去年とても大きい台風が来て、携帯電話の波浪警報がずっと消えなかった記憶があります。しかも入学したてのころ全校で津波防災訓練が行われ、どのようにして正しく身を守るかについての詳しい説明もありました。また「人と防災未来センター」では、現在の防震耐震建築構造についてのデモもありました。こうした取り組みは自然災害に対する予防と対処にとっても役立つものです。しかし避けようがない天災と比べ、戦争のような人災は人為的に抑えられるものではないのでしょうか。衝突の発生や関係の硬化を見聞きするたび、どうして当時の大先輩達のこれほど大変な努力を考えないのか、命という代価を惜しまずに引き替えた平和は誰のためなのかと思います。この容易なことではない平和がまさか本当に破壊されてしまうのでしょうか。

Day7

京都に向かいました。清水寺は 4 回目です。梅がほころび桜がまだ咲かない時節には、遠くを望むと京都タワーまで見ることができました。続いて地主神社で石をさすり、今年の良縁を祈りました(笑)。

お昼には豆腐料理を食べました。午後は金閣寺を見学してから大阪の心齋橋に行きました。

夜は焼き肉店で楽しみました。日本で最後の夜です。時間は過ぎるのが速すぎて、特に名残惜しく感じました。中村常務が賞品付きクイズ大会を開いてくれて、現場の雰囲気は盛り上がり続けました。孫先生の誕生日でもあったので、みんなで誕生日の歌を歌ってバースデーケーキを食べ、和気あいあいと過ごせたことは特筆に値します。

Day8

早くにチェックアウトして空港に向かいました。8日の日程はこのように終わり、本当に名残惜しい限りです。空港では自分でチェックインしようとして問題が起きたので、最後まで先生に面倒をおかけしてチェックイン手続きをしてもらってしまい、ほんとうに申し訳なく思っています。

この行程全体の感想をまとめて言うと、まずは感謝です。念入りなスケジュールからイベント全体を通して行き届いた配慮をしてくださった先生方、道中つきあってくれた日本の学生パートナー、親密に助け合った中国の学生のみんな、日本をよく分からせてくれた4人のガイドさん、そして苦勞を惜しまず送迎してくれたドライバーの皆さん、本当に感謝しています。そして、今回のイベントに参加したことはとても幸いでした。より深く日本を理解する機会が得られ、特に日本の若者との交流を通じて両国の若者が中日の交流と協力のために負う責任を感じました。後はやはり改めて災害（戦争）と平和について考えさせられたことです。

ごく短い8日の旅でしたが、自分が去年1年日本に滞在して経験したことよりも収穫が多かったと感じています。

今回は行程の内容が多く、具体的な細かいところまで記録することができなかつたため、上記に間違いが見られるかも知れませんが、ご指摘の上どうか大目に見てください。

黄岡師範学院 外国語学院日本語科4年 申華



時間が経つにつれて日本の旅の記憶もだんだん遠くなると思っていました。日本での滞在は短いものでしたが、あの日々に積み重ねたたくさんの思い出は忘れるどころか今なお新たです。

飛行機がゆっくりと降下を始めると「がんばれ日本！」の文字が目に入り、頭でずっと考えていた日本の姿と目の前に広がる本当の日本の姿がそっと重なり合いました。画面越しの日本はぼんやりと幻のような色あいで、視覚と聴覚を通してとらえることしかできませんでした。しかし現実には身を置いている日本は本物です。見聞きだけでなく五感でふれるすべては新鮮で興味深く心をかき立ててくれるものばかりでした。

初めて本物の日本に触れるのは、率直に言うと少し未知なるものへの恐怖感がありました。恐怖と言うと少し大げさですが、正しく言うと怖さと不安の混じり合った感覚です。中日の間にはまだ癒えない深い歴史の傷跡が残っていて、日本の国民はどのように中国人を評価するのでしょうか。メディアを通して知った日本と本物の日本は一致するのでしょうか。もし理想と現実のギャップがあまりに大きかったら、日本のイメージをどう修正すればよいのでしょうか。そうした心配が一気に浮かんできましたが、結局は文字や映像を通じて作り上げてきた日本のイメージを本当の日本に覆されるのが怖かったのです。しかしこの8日間の体験でそうした心配はひとつひとつぬぐい去られ、想像していた日本より本物のほうがさらによいのではとまで感じました。

8日間は短いです、日本科学協会の念入りなスケジュールのおかげで、1ヶ月ほど長く過ごしたように充実したものでした。自分の足で日本の地に立ったときから、時間がもっとゆっくり過ぎてほしい、日本の細かい一つ一つを觀賞できるだけの時間があればと願っていました。一方で時間がもっと早く過ぎてくれたら日本の桜吹雪や木々がすっかり色づく四季を体験できるのにも思いました。

日本に着いた当日は雨でしたが、美味しいしゃぶしゃぶ鍋で旅路の疲れも雨の冷たさも吹き飛ばし

た。石倉先生が席上で会話を交わしてくれて、さらにぽかぽかと暖かい雰囲気でした。ホテルユニゾの客室ドアを開けた瞬間、日本の収納力を実感しました。小さいながら何でも揃っていて秩序のある部屋だったのです。

朝は 6 時半ぐらいにしかならぬうちに金色の朝日が向かいのビルを照らし、その反射光の強さに 8 時も過ぎたかとびっくりして飛び起きました。早朝の東京は人々の慌ただしい足音が早いテンポで、私のゆっくりとした足取りはまるで調和しませんでした。目を向けてみると、モノトーンの影が日光の中で消えては現れて、そもそも見知らぬ顔が白色のマスクの下に隠れており、どうしても距離感があります。しかしそうしたスーツ姿がこの街と引き立て合っており、清潔で、きちんとしていて、少しの汚れもないかのように見えました。

この街で生まれて初めて日本の大学生と接触したところ、日本ドラマで見るような身なりや意地っ張りや高慢な性格ではありませんでした。反対に、優しくかわいらしくて優秀だったと思います。慶應義塾から東京タワーまでの観光案内を独りで担当してくれた諏訪園芽生ちゃんは 2 歳下の大学 2 年とは思えない頼もしさで、道中は先頭に立って引率しながら解説してくれました。慶應の食堂でカレーライスを食べ、蔵書の万巻の図書館を見て、一生かけても読み切れなと思う感嘆しました。

沖縄という名前はちょっと聞くと、ガイドの林さんが言うように、海の波しぶきが縄に当たってひっくり返す絵が目に見えます。ここでは初めて海を目にして、マグロ解体ショーも見学し、刺身も味わいました（それまで寿司でしか食べたことはありませんでした）。首里城と勝連城を見学し、沖縄の人々や大学生と交流しました。沖縄は質朴な感じがして、大自然が近く、大地の力を実感できる場所でした。沖縄に降り立った瞬間に世界中が胸まで広がったようでした。沖縄が日本の本土から離れているからなのでしょうが、日本という雰囲気がここでは少なく、熱帯の風情が強く感じられました。日本という雰囲気が何かと言うと、四季がはっきりしていて、起伏した山並みが続いて、路上では織物のように人々が行き交い、表情が厳肅で、飛ぶように速く歩くといったものです。もちろん間接的に得られた先入観ですが。私の交流した沖縄の人は親切で恥ずかしがりなのが特徴でした。いたるところで、さまざまな形で温かいもてなしを受けました。さまざまなイベントの中から適切に質素な沖縄人の濃やかな気持ちを感じることができました。残念だったのは、沖縄国際大学の皆さんにプレゼントをあげられなかったことと、東南植物楽園の優しいおじさんおばさん一人一人にお礼を言えなかったことです。

雷鳴のような音を立てて頭上を旋回する米軍の飛行機を見て、鉄条網の向こうの米国の歴史をガイドの林さんから聞き、ひめゆりの塔の経緯を知って、今日の平和は先人が血の通った肉体で築いたもので、未来の平和は私達世代の怠りない努力が必要だと感じました。国家間の政治外交には力が及びませんが、自分から始めて、中日の間の友好な交流のために微力を尽くそうと思います。もちろん平和と発展は今の世界の発展する潮流ですが、それでも歴史がもうくり返されなことを心から望んで、目の前の青い海と空、静けさと調和を大切にしたいと思います。

日本には地震雷火事親父ということわざがあるそうですね。神戸で初めて地震が急に起きたときを実感しました。模擬地震とは言え、受けたショックは確かに大きいものでした。日本は地震の頻発国です。自然災害の発生は人類には止められませんが、自分を変え、科学の力を利用して災害による損失を減らすことはできそうです。たとえば陳列室にあったさまざまな耐震発明、震度 7 の地震に耐える建築、そして大量のボランティアを目にしたときは、日本国民のしなやかさと不撓不屈の精神、安全なうちからの危機意識、未然に防ぐ精神に本当に感心しました。

京都と大阪は以前からとても魅力のある場所で、あこがれの地でした。千年の古都である京都は風情が濃厚で、金閣寺、清水寺といった名所旧跡が至る所にあつて、京都のような歴史の厚み漂うところにあつてこそ和服を纏った人々が路地を往来するのです。とても日本の色彩があります。こういうところに行かないと、本当に日本を訪れたということではできないような気がしました。

大阪の人はとても面白く、関西弁が特徴的です。今回あまり多くの関西人とは交流しませんでした。京都出身の北川さんがボランティアにいました。焼き肉の間に関西弁で話をするのが笑いが起きました。

帰国する前夜、大阪のドン・キホーテで買い物をした後に会った健吾さんという大阪のおっちゃんは親しげに声を掛けてくれて、すこし話していると何かおごってくれることになりました。こんな親切なおっちゃん初めてです。最後には何か買って食べやと 100 円くれました。心から「いいね！」です。

この 8 日で訪日団のメンバーは旅で疲れ果てましたが、日本科学協会の中村常務、宮内孝子さん、吉田玉果さん、顧文君先生はそれどころでなくお疲れだったと思います。中村常務はわざわざ東京から大阪に駆けつけ、夜の買い物につきあってくれて体を壊してしまいました。宮内さんはバスを待つ間にもまじめに行程の確認をしてくれました（写真のとおり）。吉田さんは 8 日間でかなりやせてしまったようです。顧先生も道中いろいろな解説をしてくれました。8 日間は短いです、日本科学協会の念入りなスケジュールのおかげで、最大限に日本の風土と人情を体験し、さまざまなグルメを味わうことができました。日本語がうまいわけではなく、名前も言えないメンバーもいました（写真）。毬子ちゃんと芽生ちゃんがつきそってくれて、友情の火が付きました。脳内は今でも思い出でいっぱいです。一生忘れられないでしょう。これからも思い出してはじっくり味わえるだけです。

東華大学外国語学院大学院 1 年 馬羽潔（原文日本語）



今回の訪日は私にとって一生の思い出になりました。すてきな出会いが多すぎて、どこから話せばいいのか本当に迷います。今回は、東京で日本の若者と討論会を開き、さまざまなところを見学し、沖縄の市長さんと交流し、おいしいものを食べ、本当にありがたいと思います。訪日団の中国の皆さんとだけではなく、日本の方とも友達になりました。

非常に印象深いのが、日本人の学生 3 人と一緒に秋葉原に行ったことです。お寿司を食べて、CD 屋、本屋、電器店などを回り、色々話し合っていました。そのあと、体験したことのない日本のサブカルチャー代表の一つ、メイド喫茶に行き、みんなで一緒に「おいしくな一れ」をやって、恥ずかしくはいながらも満喫しました。一番印象に残ったのは、3 人が中国に対してすごく興味があるところなのです。討論会でも話しましたが、中国と日本の情報を正しく伝えるためには、両国の人間がお互いの国に興味を持ち、向こうの国のことを知りたいという姿勢を持たなければなりません。しかし、現状としては、中国より、日本の若者は欧米系の国のことに興味があるようです。なので、3 人がこのように中国に興味があり、ずっと私に中国のことを聞くというのが本当に感心しました。

また、私が日本に行くというのは今回で 3 回目になります。にもかかわらず、日本で新しい発見や認識がありました。日本人のサービス精神や、人間味が溢れているところなど、本当に勉強になりました。

最後に、この度日本に行けたというのは、たくさんの方々に感謝しなければなりません。日本財団、日本科学協会の皆様、各地のガイドさん、沖縄の市長さん、日本の大学生の皆様、中国側の団長さん…心から感謝申し上げます。この度は誠にありがとうございました。またいつか会いましょう！

閩南師範大学 外国語学院日本学部 3 年 劉夢思（原文日本語）



時間とともに、昔と同じような生活のペースで、もう十分慣れていたすべてのことは知らないうちにだんだん忘れてしまう可能性も高い。しかし、今度初めて日本に行ったこの奇妙な旅は完全に心の奥に深く刻まれた一生の宝物と見做して、絶対忘れてはいけない断片として心の一部になった。それからもう一週間くらい過ぎたが、友達と先生たちの笑顔を思い出すたびにまた写真とか見ると、自分も知らぬ間に笑ってきて、本当に楽しかった日々だ。

初めの頃はみんなは他人のような感じで、こんな短い間にすごく仲良くなって、親友までなるなんて想像もしなかった。私は子供の頃からいつも人見知りなので、他人とペラペラ話すことなんかすごく苦手だ。いつも黙っていた、頭を頷くしかできないような私はきっと皆さんにいろいろご迷惑をかけて、とても申し訳ないと思って、今さら回想したらすごく後悔している。もっと話せばいいのに、だから、こ

のような貴重な機会を二度と与えることはないだろう。

そして、私にとって、この旅は「涙の旅」と言っても良い。なぜならば、辛かったことも楽しかったことも、涙の中で完結できる。初め東京にいった三日間で、いろいろな不慣れのせいかもしれない、食べ物も楽に食べられなかったし、夜遅くなっても眠れなかったし、いつも車に酔っていて、死ぬほど辛かった。東京での最終日、松谷孝征さんが熱弁をふるっていた姿を見ると、わたしも彼の熱意を感じているように、旅の辛さも忘れ、目の中にあつい涙が満ちた。頭の中でいくら想像しても、実際にやってみないと何にもできない。自分の力でなんとか努力すればきっといつか報われるという信条も深く覚えている。松谷さん、ありがとう!それから、混雑している大都会から離れ、居心地良い沖縄へ向かって、東中国海を超えてきた沖縄の潮風を浴びて、故郷の匂いが海を渡って私のそばにいるよう、慌てていた気持ちもすっかり解消して、私は沖縄が大好きだ。海も、人も、夕風も、何でも好きだ。しかし、時の速さは誰も止められない。最後の見学地は「ひめゆり平和祈念資料館」で、そこに第二次世界大戦一沖縄戦のドキュメンタリーを見させて、非常に悲しい物語だ。到底、戦争そのものは誰の得だ。失望して、絶望になって、最後自決の破目に至った百姓たちは誰かが助けてあげるだろう。権力者の犠牲品になりたくない、自分の命の大切に守りたいなど心からの叫びはあの戦争に残された人たちの言葉から強く感じ取った。私は再び涙を流して、そして、誠意を持ちつつ、「世界の平和を祈りますように」と館内のアンケート用紙に書いた。

最後に、孫先生と劉先生と諏訪園さんと櫻井さん、また日本科学協会のみなんさんに、誠に心から感謝します。私はいつまでも、どこまでも、みんなの顔をしっかりと覚えるように、中日の友好交流も末長く領域深く進展し続けてほしいです。ほんとうにありがとうございました。

清華大学機械工学院精密機械学部2年生 宋昆（原文中国語）



日程最後の日に、訪日団のみなとお別れをしようというとき、私は思わず「こんなに楽しい旅が終わってしまうとは。まだまだみんなといっしょに滞在したい……」と考えてしまいました。8日間はとても短かったと感じています。みんなと一緒にしゃべりたい話題、いっしょに行きたい場所はまだまだたくさんあります。ですが、充実している日程を振り返ってみると、8日間も長かったと感じます。東京、埼玉、沖縄、京都、大阪へ行って、多彩な日本の文化を味わい、さまざまな業種の人との対面で交流し、訪日団のみなと友達になれたのです。ここまで豊富な経験ができる又何ヶ月も過ぎたような錯覚さえありますが、実際はわずか8日間でした。きっとこれは日本科学協会の皆さんが念入りなスケジュール調整し全行程で付き添って職責を果たしてくれたおかげですので、この場をお借りして心から感謝を申し上げます。

今回の旅では数え切れないほど「日本って本当にいいな」と思いました。花園のように緑の満ちあふれている慶応大学、厳粛な首里城、快晴のもと清く澄んだ沖縄の海、古典的で精緻な京都などでは、何度もカメラを取り出してはうっとりとする美しい景色を記録するのが我慢できませんでした。美しい景色のほかにも、日本人が人に接するときの謙虚さと礼儀正しさ、少しもいい加減にしない態度、話し合う時の親切さ、他の人の立場で考える入念さと周到さには、胸に温かいものを感じました。さらに交通は順調、空気は清潔で、そして心地良い温泉、便利で手軽なコンビニ、どこにも見られる公共の雨傘、さまざまなおいしい食べ物があり、日本の先進ぶりを感じさせてくれました。中国が学ぶに値するところは日本に多くあると感じています。日中が友好的に付き合う重要性は言うまでもありません。

今回の旅の中で、全身全霊で日本の美に感銘を受けたと同時に、新しい思考と感動もたくさん湧いてきました。27日午前の討論会では中国文化を心から愛する日本の学生と知り合うことができ、みんなと心から意見を交換して、日中の友好関係を築くために知恵を出し合えたことはとてもうれしく、また両国の未来の友好関係に対して希望でいっぱいになりました。話し合う中で、両国民の間にはまだいくつか誤解が存在していることに気付きました。もしもお互いに理解を深めることができれば、日中友好関

係はあっそう発展するでしょう。そこで知識クイズ大会、作文コンクールの意義を感じ、そして日中友好事業に対する日本科学協会の貢献の大きさを感じました。そのほか、ひめゆり平和祈念資料館、人と防災未来センターの見学も深く印象に残っています。戦争と災害の残酷さ、人間の弱さを目の当たりにして、改めて人々が平和につきあい助け合う重要性を感じました。

今回の日本の旅ではたくさんのすばらしい記憶も残りました。今後は最大の努力を尽くして、今回の日本訪問で見聞きしたこと、日本の長所をもっと多くの人に伝えて、日中友好のために貢献したいと思います。両国の友情がとこしえに続きますように。

南京工業大学 向家瑤（原文中国語）



今回は「笹川杯日本知識クイズ大会」の優勝選手として中日友好交流に参加できたことをとても光栄に感じています。ごく短い 8 日の日程でしたが、心から日本のホスト達の情熱と親切を感じました。

2 月 26 日の朝に上海を発った飛行機が東京の成田空港に到着すると、ゲートを出てすぐのところで日本の受け入れ側がカードを持って待っていてくれました。異国にいながら最初に感じたのはぬくもりでした。一行が集まってから、簡単な自己紹介と名刺交換を行いました。

8 日の日程が始まると、東京から沖縄、そして大阪と京都を回り、日中青年討論会から観光、市長との会見まで経験し、すべての活動が面白く意義あるものでした。その中で最も印象に残ったのは 2 月 27 日の日中青年討論会です。当日の朝に日本財団の会議室を訪ね、慶応大学を初めとする日本の大学生達との交流を行いました。話題は日常生活、恋愛といったものから中日の友好交流、中日の青年の政治観まで展開され、いまどきの日本の青年の考え方をだいたい理解することができました。討論会はとても順調に進み、私も中日がどのように障壁を打ち破って交流を更に進めるかについて考えました。今回の機会がなかったら、ここまで真剣にこの問題を考えなかったかもしれません。

続く日程では沖縄を訪れました。寒い東京と違って沖縄は春のような暖かさでした。豊見城市に着いてすぐ、市民の皆さんが伝統舞踊による歓迎会を開いてくださって感動しました。私たち一行のために豊見城市民の皆さんがわざわざ用意してくださった歓迎会では、当地の伝統舞踊を見た後、豊見城市長のリードで私たちも舞踊に参加させていただきました。夜のパーティーでは、初めて懐石料理と沖縄名産の泡盛を味わいました。沖縄滞在はわずか 2 日間でしたが、沖縄国際大学の学生達と交流でき、和服を体験して、沖縄米軍基地を遠くに見ることまでできたので、これほど目新しく面白かった体験は初めてです。すべて私の最も貴重な追憶と財産になるでしょう。特に「ひめゆり平和祈念資料館」を見学して、その年、沖縄の少女達の犠牲と引き換えに得られた平和はとても大切にすべきだと感じました。

時間の過ぎるのは速く、旅程も半分を過ぎました。一刻の休みもなく今度は大阪と京都です。関東のにぎやかさを体験したからには、関西の風情を体験してみなければなりません。和の風情に満ちた京都では、清水寺と金閣寺を拝観しました。表面だけざっと見るような感じでしたが、まぎれもなく往時の日本のにぎやかさを感じました。関西地区を歩いていると、そこかしこでかわいらしい関西弁と関西人の親しみのある笑顔に出会いました。これも日本というこの小さな国に対する新たな認識です。

ごく短い 8 日でしたが、見聞きして学んだことはたくさんあり、また道中たくさんのことを考えました。日本語を専攻に選んだのは単なる偶然でしたが、日本語を学んで本当に良かったと今は思っています。学習の過程で少しずつこの国を知り、人よりも多くこの国のことを理解できることはいいことでしょう。特に、中日にはかつて哀しい過去がありましたが、経済と政治の発展に伴って両国が協力することは疑うまでもないので、そのときこそ、日本語を専攻として学んだ私たちの出番です。両国が互いを

参考にして互いから学び、共に発展するのが王道です。私は帰国後、今回の学びの旅のことを同級生や友達に伝えようと思います。

中国各地から集まった友達と日本で様々な面からケアをしてくださった日本科学協会、日本財団の皆さんともお別れしました。ですがお別れと言っても永遠ではありません。将来いつの日かきっと中国で、日本でまた集まれるはずです。

北京大学外国語学院日本語学部博士課程1年 暴鳳明（原文日本語）



日本財団および日本科学協会からの多大なご協力をいただいたおかげで、私たちの訪問は無事終了することとなりました。日本に滞在した八日間は短い間ですが、日本財団の尾形理事長および日本科学協会の大島会長、加藤先生、中村常務、顧先生、吉田先生、宮内先生、友人の方々には、いろいろとご奔走いただき、大変お世話になりまして、衷心より御礼申し上げます。感謝の気持ちがいっぱい、どんな言葉でも言い表せないです。

日本の現代化、伝統の美しさ、歴史文化を体験させるために東京、大阪、京都、沖縄などでの見学コースを設計してくださいました。それをきっかけとして日本の名所を観光、見学させていただきました。それを通じて、日本に対する理解が一層深まり、特に沖縄の歴史、チャンプルー文化など、私たちに深い印象を残してくださいました。

実は、今回の来日は私にとって二回目です。一回目は十年前の2005年5月です。その時も東京、大阪、京都などを訪れました。十年がたちまして、私のような外人の目から見れば、その景色や、風物もあまり変わらないです。十年間は歴史上のあつという間だけですが、人間にとって短くない時間です。大学を卒業したばかりの青二才が今の自分に成長してきた十年間で経験したのは日本のことと離れないです。溯ってみると、大学入学した時外国語が好きなのでよく考えずに選んだ日本語専攻はある程度で人生の道を左右することが分かるようになりました。人生は冥冥の中に定められたものではないかと思えます。そうした以上、これからも引き続き日本に関連する分野に進むべきではないかと覚悟します。中国の諺「順天応命」の意味のように、私も定められた人生の道に従い、中日友好事業に自分の一生を捧げたいです。自分の歩むべき道が見つかり、自分のやるべき事に従事するのは楽しいことです。使命感があるこそ彷徨って動揺することはなくなり、これから前進する道でどんなことがあっても恐くないです。

中日両国は一衣帯水の隣国で、両国人民は二千年あまりの友好往来の歴史を持っております。私は若い世代の一人として両国友好の懸け橋になる責任を持ち、両国間の平和、友好関係を構築することに自分の力を貢献したいと思っております。

日本に滞在した八日間の見学したこと、経験したことはこの一生忘れがたい、素晴らしい思い出になりました。日本国民の中国人民に対する友情を肌で感じ取れたことは永遠に私たちの記憶に留まることでしょう。先生の方々にまたお会いすることを楽しみにしております。

いつまでもお元気で、また逢う日まで。

ありがとうございました。

北京理工大学 日本語文学科 四年生 徐愷（原文日本語）



あつという間に、忙しくて楽しかった八日間もついにその末に迎えてきた。日本に参ったことは二回目で、前回とすごし違うスケジュールのおかげで、日本の新たな側面を発現した。

最初の目的地は東京である。日本の現代性の代表的な都市である東京都には、まるで鉄筋コンクリートの森に囲まれるように、高層ビルがいっぱいある。それに対して、最後の目的地である京都府は、日本の伝統的な魅力をきちんと保っていて、古代の長安に真似って築かれたその様子も、まだその

大馬路から見えるそうである。孟郊の詩には「春風得意馬蹄疾、一日看尽長安花」という句があるが、非常に残念ながら、今回の訪問であいにく都合がよくなかったため、花見をするチャンスはなかった。すこし惜しかった。

冷雨が降り続けていた東京と違う。やよいの沖縄は、宛も既に真夏に迎えてきた。遠く見える浅葱の海は、群青の空との境界線も曖昧になる。沖縄ではもっとも印象深いのは沖縄方言の「イチャリバチョーデー」という句です。もし中国語に翻訳すれば、「四海之内皆兄弟」というふうに言うならよいかもしれない。「一度出逢ったら皆兄弟だから仲良く付き合おう」。三年間ずっと日本語で勉強していて、諺や熟語もだいぶ学んだが、こんな話を聞いたことはまったくなかったと思うのである。面倒がよい沖縄の方々に、思わずに親しく感じた。

日本の方々に物事の細部で慎重に配慮して下さることに、ごく感心した。事前の予備案も、招待状とチケットの正しさを慎重に繰り返して確認して下さることも、迷わないために、ネームカードの裏に宿泊先を印刷して下さることも、いずれのものから、日本の社会人たちの慎重さと責任を取る姿勢をきちんと感じることである。極めて感心した。特に、神保町のある古本屋で本を探していた時に、受付の優しいおじいさんは中国からの大学生である私たちに、わざと店のカタログを無料で渡してくれた。この熱意をこころでありがたく思う。こんな熱意がある限り、言語、文化そしてイデオロギーの壁を越えて、お互いに友誼を永遠に保つことは、決して夢ではない。

南京工業大学日本学科4年 周倩（原文日本語）



いよいよ出発の日になった、2月26日私は上海から東京成田空港に行って、それからは三日間の東京見学が始まった。ガイドの坂下さんはとても親切な人で、バスの中で色々教えてくれた。バスの通路に従いながら説明するのはとても印象深い。26日はあまりよい天気ではないが、次の27日からは晴れてくれていた。一年前くらいは友達と一緒に東京に行った。当時は留学生で、一般の観光客として行った。訪日団の一員として日本に来たのは初めてで、日本の方々に情熱的に招待された。一年ぶりの東京は相変わらず賑やかで、平日の毎朝、サラリーマンたちが通勤しているのが見える。日中若者討論会は少し緊張していた。その日の午後は日本人の若者たちと東京タワーと慶應義塾大学に行った。みんな親切で、なんでも教えてくれていた。東京タワーは夜景が美しく、好きな場所だ。

三日後は憧れていた沖縄に行った。日本人の二人の女の子も一緒に行ってくれた。二人は中国語ができ、とても親切な人だ。旅行中は色々世話になった。沖縄はとても暖かい場所で、景色もとてもきれいだった。日本の本島とは違う感じがする。首里城はさぞ中国からの影響が深いだろうと思っている。沖縄の料理もうまく、中華料理が多い気がする。生の魚などはあまり好きではなく、沖縄の中国風料理が好きなので、いっぱい食べてしまったら、別バラだと言われていた。東南植物楽園を歩くのはいい気分になれる。でも、アメリカ軍の飛行機の騒音がうるさい。沖縄市に住んでいる住民たちにとってはきっと大きな挑戦だろうと思っていた。自分の目でそのアメリカ軍の基地を見てみたら、確かにその大きさに驚いた。83パーセントの面積も占められているようだ。海外でもそのような大きな基地を持っているアメリカはなかなか恐いと思っていた。沖縄国際大学の学生たちも親切し、色々話してくれた。今度は同世代の友達はできてとても嬉しい。沖縄の海はとてもきれいで、夢のようだった。海岸に行って、もう戻りたくはない気持だった。機会があれば必ずもう一回沖縄に行きたいとその時に決めた。沖縄では楽しく過ごしていた。

その後は飛行機に乗って、神戸に行った。神戸は初めてで、人と未来防災センターに行った。地震を経験したことがない私は1975年の阪神・淡路大震災のビデオや録音を見てすごく感動した。地震ってこんなに恐いと自覚した。中国では2008年の四川省の大震災もきっとそうだろう。ボランティアについての講演も聴いて、この前知らないことが分かった。ボランティアの活動にはもっと支援する必要がある。

専門家からの支持や指導も欠かせないもので、両方とも頑張っていけばいい結果はなれると思うようになった。京都は二回目で、清水寺は相変わらず観光客がいっぱいだった。道路の両側の店が多く、もう少し買い物の時間が欲しかった。扇子はとてもきれいだ。見るだけでも嬉しい。京都の湯豆腐はとても美味しく、今でも忘れられない。(笑) 店からも可愛いプレゼントがいただき、とても満足だった。店に行く小さな道を歩くのもいい経験だった。金閣寺の見学も二回目だった。工事がされているところが多かった。それにもかかわらず相変わらず大勢の観光客がいた。大阪のホテルに戻って、いよいよ最後の日になる。七日間ずっと一緒にいた先生たちや友達とは別れたくない。短い間だけど、とても楽しく過ごしていた。日本科学協会の皆様にお礼を申し上げたい。それから同行してくれた慶應義塾大学の二人の芽正ちゃんとマリコさんにも非常にありがたい。色々お世話になった。やさしく声を掛けてくれたし、色々教えてくれたし、本当にいい勉強になった。最後に七日間ずっと一緒にいた中国人学生にも感謝の気持ちを言いたい。違う大学から来たのだが、すぐ親しくなった。これからも連絡が取れるように祈っている。

今度の訪日はとてもいい経験で、私にとっては忘れられない貴重な体験だった。皆さんに深く御礼を申し上げる。

北京大学 元培学院外国語言語と外国歴史専攻 4年張雪禾 (原文中国語)

沖縄紀行



1週間のスケジュールいっぱいの旅行で記憶している面白いこと、すばらしいものは数多く、二言三言では恐らく言い尽くせません。ここでは、最も感動したところ沖縄についてだけ書きたいと思います。

日本には交換留学で半年いたことがあります。沖縄を訪れたのは初めてです。那覇空港に着くと、頭上には沖縄方言「めんそーれ」と書かれた看板がかかっていました。東南アジアで人気の『花』の曲調、『キル・ビル』の鍛冶屋、そして歴史論争でよく出てくる琉球の文字と、脳内のイメージが急に膨らんできました。沖縄は元々ただの小島だったのが、移住者、戦争、駐屯軍などの一連の歴史の変革を受けてきた土地です。辺境のひとつだった地区が、世界の注目を集めることになったのです。あまりに特殊で忘れようがありません。人々は沖縄に対して各種の感情を与えたことで次第にそれが唯一の代名詞、東アジア世界の1滴の涙、魂と奥行きがある場所になったのです。

しかし、それだけいろいろな想像をしても、実際の世界がくれる驚喜のほうが多いものです。真っ青な空、清く澄んだ海水、すべてが大好きなアモイのコロンス島のような感じでした。勝連城の最も高いところに立つと、一面は東シナ海、一面は太平洋で、青い海と空は沖縄島を包む揺りかごのよう。今までずっと海が好きです。蘇軾の『前赤壁賦』に「蜉蝣を天地に寄す、眇たる滄海の一粟なるをや」という句があります。海の広大さは人に自分のちっぽけさを感じさせますが、人はだからこそ気兼ねなく自由自在なのです。

海辺の食事をした場所には、低い屋根の上のにぎやかな看板がかけられ、遠くにはぼろぼろの車が何台もありました。ひゅうひゅうと吹く海風に、海辺の人の粗放さとおおらかさが漂っているようでした。ホテルのビュッフェには刺身が並んでおり、好きなだけ取れるようになっていました。マグロ解体ショーを觀賞してから、みんなは次々に箸を動かしました。切り立てのマグロは口の中でひんやりとして、少しも生臭さがありません。舌鼓を打っているとき、テーブルの足の側にいた小猫はうらやましそうでした。そうだ、お情けで一切れあげよう。

恐らく各自の性格が違うからでしょうが、一目ぼれする場所は人によって違うものです。パリに夢中になる人、京都を偏愛する人がいますが、私はこの海に育まれた街が好きになりました。コロンス島で1日を過ごしたとき、夜は惜しみなく目を閉じ、夜明け方に潮が満ちる音を聞いて起きるのが好きでした。沖縄に着いてから気付いたのは、そもそも福建と縁が深くしかも似ている場所がまだあるということで

す。沖縄は暖かくて沖縄の人の心も温かだと誰もが言います。所変われば品変わると言いますが、このような砦を育てられるのは海しかありません。沖縄に対する感情は、気付かないうちに福建とのつながりでもっと親しいものになりました。

沖縄でのパーティーで、現地の声望が高い教授に沖縄の人はどうアイデンティティを感じているのかと質問しました。教授の答えによるととても微妙で、若者は見ているテレビも使う教科書も普通の日本人と全く同じため日本人だと自覚しているが祖先は日本人ではないのだそうです。この教授は毛という姓の祖先を持っていますが彼自身には中国語が通じません。社会学の古典的理論がこういうときぴったりです。民族は「想像の共同体」で、人々の共有する一組の観念により決まるというものです。さらに時間が経つと、毛氏の後裔は彼らの祖先、漢族の名字を完全に忘れてしまうかもしれませんが、彼らの生活の幸福を妨げることはありません。沖縄の歴史には曲折が多く、中国の血筋と日本の文化が入り混じっていますが、そのことが結局この地方の湿っぽい土壌と親切な人を作って、私を惹きつけています。

出発する日の午前、ひめゆり平和祈念資料館と米軍が駐在する嘉手納町にも行きました。この二箇所は、沖縄の歴史の中で最も重い部分を代表しています。ひめゆり平和祈念資料館では沖縄戦での生存者に会うことができました。今なおボランティアをしているかなり高齢の彼女は、体こそすでにあまり利かないようでしたが、70年前の境遇と彼女の平和への願望を語り出すと、興奮をこらえきれないようでした。沖縄にとっての重い歴史は、世の中の他の人にとっても他人事ではありません。その後、嘉手納町の展望台の上で米軍基地を眺めていたとき『日本の浮沈』という本は題名がよくできているなと思い出しました。朝日の照らす桜、急激な起伏が地球村を彩りますように。

北京大学外国語学院日本語学科 4年 徐涵（原文日本語）



この度、笹川杯日本知識大会・作文コンクール訪日団に参加できて、本当に楽しかったと思います。日本科学協会の先生たち、同行してくれた桜井さんと諏訪園さん、いろいろご案内してくださいまして、本当にありがとうございました！！八日間の訪問はすごく短かったですが、東京と沖縄、神戸、京都及び大阪のいろいろな魅力的なところを見学することができ、日本の伝統的な文化や現代の都会生活、独特な沖縄文化などを実体験することができました。そして、日本科学協会の皆さん、日中討論会に参会した日本人の学生たち、及び東京と沖縄と大阪のいろいろな地元の人々にお会いすることができて、日本各界の人々と交流することによって、日本の文化や日本国民の生活、地元の人々の考え方への理解を深めることができました。親切な日本の方々の姿が私の貴重な思い出になります。私は皆さんのことを一生忘れません！私は国に戻っても、この八日間の体験と皆さんのことを回りの人々に伝えます。自分が実体験した日本を回りの人々に伝えます。これからも私は一所懸命、自分の力で中日友好に少しでも貢献できるように、頑張りたいと思います！！

清華大学 理学院数学学部修士2年 王興飛（原文日本語）



日本語は独学で勉強方法もいささか邪道なので、不適切なところがあったらなにとぞご了承のほどよろしく願いいたします。
自分は本来日本語とは無関係の数学専攻でこの大会とは縁遠い存在だったのですが、先生の日本語学科以外の学生から参加者を選ぶという発想から今回の大会に参加することになったのです。日本語自体には大変興味を持っていますし、日本に行くチャンスがあるというのもとても魅力的でした。

ほかのチームメイトも日本語学科ではなく、人選にさほどこだわったわけでもないのに、一見寄せ集

めのチームにも見えましたけど、意外と相性のいいチームになっていました。何より全員が個人的に日本に何らかの強い興味をもつというのが大きかったです。そこもまさに先生の狙いだったのでしょう。

準備は最後の二週間の追い込み以外は比較的のんびりと進めていました。過去問題集を見ると本当に様々な分野の問題があって、分からないことだらけでした。これを機にいろいろ調べてみて覚えていきました。興味を持てる分野ではいろいろ新しい発見があって結構面白かったですけど、興味を持たない分野に関してはさすがに一苦労しました。

大会では出題範囲の広さに加え、ルール上運の要素が強いのも相まって最後までひやひやしどおしでした。一回戦はぎりぎり通過できましたが、決勝戦では抜きつ抜かれつの大接戦を繰り広げるも、惜しむらくは四位と賞品一步手前でした。残念無念でした。それだけに繰り上げ参加になった知らせが舞い込んできた時は本当に舞い上がりました。いろんな偶然や幸運に恵まれて、念願の初訪日が思わぬ形で実現しました。

訪日においては以前知識でしか知らなかったことや知識では知り得なかったことをいろいろ体験できました。手塚プロダクション、首里城、清水寺……目に映るものは新鮮なものばかりでした。日本人と話すことは以前にもあったのですが、いざ日常生活の中で普通に日本語を使ってみると結構どきどきしてしどろもどろになることもありました。毎日充実したスケジュールでホテルに戻ると心地よい疲れとともに眠りにつきました。日本科学協会の方々や日本の学生さんたちにもよくしていただいて、最後まで楽しく過ごせました。

最後にこんな機会を下さったいろんな方々に感謝を申し上げたいと思います。本当に素晴らしい思い出になりました。ありがとうございます。

清華大学社会科学学院心理学専攻二年生 于馨



訪日団に自分が参加できることが決まった瞬間から、私は今回の日本の旅に関して色々想像を膨らませていました。でも、期待が高まる一方で、何度も自分で自分に「期待しすぎちゃいけない」と言い聞かせていました。私にとっては初めての日本ではないし、期待が大きい分、現実との差を感じやすいからです。しかし、結果は私の期待と想像を遥かに上回るものでした。日本に出発する丁度一週間前に二十歳になった私に、神様から送られたプレゼントに思えた、夢のような時間でした。

* こんにちは、東京！

待ちに待った日が来た！私は遠足前に小学生のように興奮で眠れず、睡眠不足で目をこすりながら、同じ学校で、笹川杯の時に肩を組んで戦ったチームメイト、宋昆ちゃん（通称しゅりちゃん）、王興飛くんと一緒に朝早くから空港に向かいました。車の中、しゅりちゃんと忘れ物はないかと話していたら、副運転手席に座っていた王くんが振り向いて、「夢と希望さえ忘れてなければ大丈夫」と一言。それが私たちは大いに気に入り、三人の合言葉みたいになりました。

空港で劉先生、孫先生、ほかの訪日団員のみなさんと落合い、いざ、東京へ出発。知識大会の会場では、競い合い、緊張してた他校のみなさんとも、和やかな雰囲気旅を共にできることになってとても嬉しかったです。飛行機での移動はとても快適で、成田空港にはあっという間に着きました。空港では顧文君先生が私たちを暖かく迎えてくれ、そのまま他のフライトでくる団員が揃うのを待ち、東京都内に向かうべくバスへ。外は雨が降っていましたが、バス駐車場まで頭上に雨除けの天井が続き、結局持ってきた傘の出番なし。日本に着いて早々こころばせのある設計に感心してしまいました。

東京都内に向かうバスの中では、ガイドの坂下さんが流暢な中国語で東京の紹介と窓から見える風景の解説などをしてくれました。東京ディズニーランド、レインボーブリッジ、東京周辺の交通事情などとても興味深い内容ばかりで、バスの移動時間がたのしく、短く感じました。特に印象深かったのは、

途中で高い煙突のある工場らしき建物があり、坂下さんの解説では、それはゴミ処理工場で、中ではゴミを燃やしているそうです。そして、ゴミを燃やす時に発する熱は温水プールの加熱などに利用され、煙突も汚染気体ではなく、ただ水蒸気を排出するための、とても環境にやさしいシステムになっているという。また、日本の小学生は、必ず一度はゴミ処理工場を見学するとか。こういう物は、中国では中々聞いたことがありません。人間の都会が生み出す大量のゴミは、中国並び全世界で問題になっています。日本の、このように環境と付き合っていく賢いやり方があり、また、それを次の世代にちゃんと受け継がせているところは、尊敬するに値、中国にも参考価値があると感じました。

新橋のホテルに着き、チェックインを終えて、日本財団主催の歓迎会に向かうころ、辺りはもう暗くなり始めていました。夜が訪れ、東京は華やかで独特の姿を私達の目の前に表わせたようです。私達を乗せたバスは、原宿、渋谷など、東京で一番賑やかな街々を通り過ぎて行き、燦然に輝く都会の光は、私の心を躍らせました。とくに、雨水で少し曇った窓から見る遠くの東京タワーのぼんやりとした赤い光は、これ以上ないほどロマンチックでした。

会場では、光栄にも尾形理事長と同じ机につかせて貰いました。食事はもちろん言い分のないほど美味しかったけれど、それより「美味しかった」のは尾形理事長のお話。笹川杯の授賞式の時に、理事長がお話した、日中関係に対する思いは私の心の中の考えと共鳴するものがあり、大会が終わった後もよく思い出して、吟味していました。それを本人と直接交流出来る機会をもらい、とても幸運におもえました。「歴史というものは、見る角度、記録する立場が違えば、全く違う形で我々の目の前に現れる。それをちゃんと認識した前提でないと、如何なる話し合いも進行して行くことができない。」理事長の考えは、歳月の積み重ねを感じさせるものであり、また深く考えさせられるものでした。こうした真剣なお話のほかにも、ご家族のお話で和み、中国各地での旅行のお話で盛り上がりました。

歓迎会が終わった後は、各自の部屋に帰って休む予定でしたが、私を含めた何人かの女子が、ドラッグストアに行ってみたくリクエストしたところ、中村常務が付き添ってくれました。私達は、ホテルから駅前のドラッグストアまで夜の新橋を歩いていきました。街は賑やかで、サラリーマンであふれていました。たまに、ひどく酔った姿の方も目に入りました。そんな風景を見て、中村さんは「酔ってるおじさんがいっぱいいるでしょう？この人のなかにはね、昼間会社で一生懸命仕事して、家に帰ってもかみさんや子供たちに相手にされない人がいっぱいいて、こうやってお酒を飲むことでしか癒されないんだよ」といいました。それが本当か、ちょっとした冗談かはわかりませんが、私の目に映る様々な人間模様は、東京の煌びやかな光の陰に隠されている、たくさんの孤独な心の存在を思わせます。これは北京も同じ。たぶん、現代大都市共通の病なんじゃないでしょうか？

その晩、ホテルで小さな発見が。シャワーの後、洗面台の鏡を見たら、一か所長方形に曇ってない部分がありました。どうやら、その部分だけ鏡が発熱していて、曇りを防いでいるようです。自宅では、浴室を使った後、どうしても曇ってしまい、鏡を見たい時は何度も水気を拭かなければいけませんでした。「これは便利！」と思う同時に、ここまで細かい気遣いに関心してしまいました。些細なことかもしれませんが、私には、日本の「おもてなし」の精神を感じました。

* 若者たちに芽生えた友情

翌日、私達は「日中若者討論会」に参加するため、朝から徒歩で会場に向かいました。その日は平日で、私は歩いている途中で、無言に早足で出勤するたくさんの人々を見ました。その光景にすこし驚けると、「東京の人は、歩く平均速度が日本で一番早いだって」と、先生に教えてもらいました。北京と同じ、やはり大都会の生活リズムは早いようです。そんな東京の出勤光景を見てるうちに、日本財団ビルに着きました。

討論会では、「日中関係の改善」を中心に、「日中若者の恋愛事情」、「如何にして日中お互いに良好なイメージを伝えるか」などのテーマに関して意見を交わしあいました。私達はそれぞれ6人のグループに分けられ、訪日団員3人に対して日本の大学生3人という形で討論しました。日本の大学生と面と向

かって話すということで、私達は始まる前からかなり緊張していました。上手く交流できるかな？という不安もありました。しかし、グループ内で自己紹介が始まった頃は、そんな不安はすぐに消えました。特に私のグループで、慶応大学からきた山田くんの「僕の趣味は、女装です」という爆弾発言と、美しいと言わざる負えないチャイナドレス姿の写真から始まった自己紹介は、ガラッと雰囲気を変えてくれて、私達はすぐに打ち解けあいました。

討論の内容については、残念なことに、グループメンバーほとんど全員が恋愛経験ゼロという意外な状況で、「日中若者の恋愛事情」についてはあまり話せませんでした。その代り、「如何にして日中お互いに良好なイメージを伝えるか」についてとても熱い討論が出来ました。私達は、今の日中関係を改善し、お互いプラスなイメージを伝えるためには、お互いの国のイメージをメディアだけを通じて知るのではなく、ちゃんとお互いの国に行って、人々と触れ合って、生身で感じとる必要があるという結論に達しました。言い換えれば、日中の接触点をもっと作る必要があるということです。では、どうやってその接触点を作ればいいのでしょうか？私達はいろんなアイデアを出し合いました。私は、「今の状況からみて、政府を通しての接触はむずかしい、民間が動くしかない、特に、ビジネスを通してなら、接触点を作りやすいのではないか」という考えをみんなに伝えました。日本には優勢を固有している分野がたくさんあります。これは、日本に来て短い間で確信したことです。例えば、ゴミ処理工場をみてエコ事業、いろんな建物のうつくしい内装をみてインテリア、街で歩くたくさんの綺麗な女性達をみてファッション・美容、ホテルの曇らない鏡をみてサービス業。中国は、経済の猛成長に伴って、これらの分野でニーズが溢れてます。また、日本は不景気で、就職も楽観ではありません。では、日本の企業は、中国に来て発展を求めてはいかがでしょうか？中国には巨大なマーケットがあるのですから。事実、韓国は一足先にもう行動を起こしています。中国の芸能界には韓流が吹きはじめているし、街でも韓国の化粧品ブランドの店舗があります。日本も来るべきです！もしビジネスがうまくいって日中合同の経済利益が増えたら、両国の政府も、企業、民間からの圧力で、外交を友好的にしざる負えないはずですよ。

このように、私はとても熱くなって意見を語り、みなさんからも素晴らしいアイデアがたくさん出ました。東京都市大学の石井くんはとても真剣に私達の意見を聞いて、上手くまとめてくれて、東京大学の倉沢くんは私達の考えを会場のみなさんにわかりやすく発表してくれました。ほかのグループの発表も、建設的な意見満載で、価値のあるものでした。この討論会で、私は日中のみなさんの両国に対する熱情を感じました、そして、短い時間で、私達の間には絆ができたと思います。私達のような若者で協力しあって作っていく未来は、きっと希望に満ちた世界でしょう。今回の討論会のあとで、私はそう信じたくまりました。

討論会を終え、午後はルート別のグループに分かれて、東京の観光です。秋葉原、東京タワー、渋谷原宿などあるルートの中で、私は浅草・スカイツリールートを選びました。このルートは、訪日団員の間ではあまり人気がなかったのですが、日本の学生たちには意外と大人気！私を含めた訪日団員3人に対し、6人の日本大学生という組み合わせになりました。それに、日本の大学生の中に、普段は浅草でガイドのバイトをいっているという田中さんがいて、ありがたいことに、とてもプロフェッショナルな案内をしてもらいました。

まずはじめに、私達は浅草の「ヨシカミ」というとても有名な洋食屋さんで昼食をとりました。ここでちょっとした事件が。オーダーを終え、料理がでるのを待っている最中、隣に座っていた劉曉娜先生がカバンからペットボトルのお茶を取り出し、飲み始めました。それを見た店主さんが、私達のテーブルに来て、「持ち込み飲食禁止」のマナーに関して親切に説明してくれました。日本の飲食店では、そのお店が提供する飲食をお客さんに楽しんでもらうため、持ち込み飲食は遠慮してもらいたい、と。これには、私も劉先生もすこし驚きました。もちろん、中国の飲食店も、持ち込み飲食完全OKではありませんが、通常これは「マナー」というよりは、ある種の営業ポリシーと認識されていて、また、ペットボトルに入ったお茶ぐらいはあまり注意されません。でも、「持ち込み飲食禁止」は日本ではほぼ常識のマナーだそうです。もしかしたら、このマナーの中には、お店が自分の作る料理に対する誇りも込め

られているかもしれない。このマナーも、日本の人々のある種の文化の表しなのだろうか？私と劉先生にとって、とても印象深い出来事となりました。

美味しいビーフシチューを食べたあと、私達は本格的な浅草観光を始めました。浅草の街は、独特な味がでていて、歩いていてとても楽しいものです。前日の、モダンでおしゃれなビルが並ぶ風景とは違い、老舗が並び少し古風な街並みは、東京のまた違う一面。たまに見かける人力車は、ノスタルジックな気持ちにさせます。そんな街をまったりと歩きながら、私達は浅草寺に着きました。さすが観光地、世界各国の観光客でにぎわっていました。

浅草寺、雷門の観光を終えて、私達はスカイツリーに向かうことにしました。スカイツリーに行くには、色々な交通手段がありましたが、せっかくなので人力車に乗って行くことにしました。人力車の引手さんたちは、私達を案内してくれた田中さんのバイト仲間でした。田中さんのことを「心の友よ！」とよびながら、とても仲良く肩を組んだり、笑いあったりする場面を見て、見ている私が心温まる、日本の若者同士の友情を感じました。私と劉先生が乗った人力車を引っ張ってくれたのは、明るくハンサムな若い男性で、英語もとても流暢。話したら、なんと慶応大学の学生でした！私は、午前の討論会で慶応の学生さんたちとたくさん話したので、親しみを感じました。彼は当時春休み中で、バイトとして人力車をひいてるそうです。そこで私は日本の大学生が少し羨ましくなりました。中国の大学では、バイトはあまり流行っていません。それに社会には、大学生ができるバイトなんて限られています。でも日本では、大学生は色々なバイトができ、またこのような面白いバイトも立派な社会実践になると思います。彼は、ただ人力車を引っ張ってくれるだけではなく、途中に見える景色を解説し、私達と会話も続けてくれました。（二人の大人を乗せた人力車を引っ張りながら同時にこなすのは本当にすごいことです…！）そしてスカイツリーに近づくにつれ、次から次へと素敵な演出が私達を待っていました。まず、ビルとビルの中の細い道で彼は突然車をとめ、ミステリアスに「お二人はスカイツリーが実は二つあるのをご存じですか？」といい、私達の後ろを指さしました。困惑した私達が振り向くと、そこには金色のガラス張りのビルが立っていて、向かい側のビルの間からちょうど姿を覗かせたスカイツリーを映していました。「これが、知る人ぞ知る、ゴールデンスカイツリーです！」それを見た私達は、一斉に「わあ！」と声を出してしまいました。あまりにもロマンティックだからです！それに、これは普通の人知らない「ひみつ」。私も先生も心が躍りました。さらに、そろそろ到着する時、彼は私達に目をつむらせ、私達がドキドキワクワクしながら待っていると、彼は少し進んだ後、車を仰向けにねかせて、「目を開けてもいいですよ」といいました。そこで私達が見た光景は、空高くそびえ立つスカイツリー！私達はスカイツリーのほぼ真下から見上げていて、目に映る光景はとても迫力のあるものでした。そこで私達はまた歓声を上げ、人力車の旅はクライマックスに。最後私達がスカイツリーを背景にした写真をリクエストしたら、彼は高いスカイツリーをフレームに収めるべく、地面に仰向けになってまでして写真を撮ってくれました。（ちなみにちゃんとフレームに収めるには多少の撮影スキルが必要で、彼は趣味で撮影をやっていたので素晴らしい写真が撮れ、素人の私達が後で何度やっても完全なスカイツリーは撮れませんでした…）今回の人力車の旅は想像以上に素敵で、私達は大満足でした。そして個性豊かな慶応大学生との出会いもとてもいい思い出になりました。

夕方、各ルートで観光していたみなさんがレストランに集まり、日中若者の懇親会が行われました。一つ一つのグループが各自の観光見聞を発表し、私も慶応の石田くんと一緒にみなさんに観光でみた、起きた面白いことをお話しました。他のグループも色々な場所に行き、話を聞いているだけで、楽しさが伝わってきました。夕飯中、わたしが一度日本のカラオケを体験してみたいと同じグループのみんなに話したら、日中の学生でカラオケ二次会を開くことになりました。カラオケでは、日中両方の学生が知っている懐かしいアニメソングで大いに盛り上がりました。同じ歌を歌って、同じ世代が共有した記憶を分かち合っ、私達の絆はまた深まったような気がしました。

帰った後、工農大の佐藤くんから「今日はとても楽しかった！始めはどうやって中国のみんなを楽しませようかなって考えてたんだけど、いつの間にか自分もみんなと一緒に楽しんじゃった！」という

メールをもらい、とてもうれしかったです。日中の若者の間には、確実に友情が芽生え、これからもどんどん芽生えていくと信じてます。

*感動と、うれしさと

東京三日目の朝、手塚プロダクション新座スタジオに見学にいきました。私は、小さい頃から漫画が大好きで、「まんがの神様」である手塚治虫先生の仕事場を見学できると知って、とてもワクワクしていました。私達は、手塚先生生前最後の仕事場がある、埼玉県新座市までバスで行き、まず初めに手塚プロの代表取締役社長松谷さんの講演を聞きました。「日本の漫画・アニメ・手塚治虫」をテーマにした講演は、日本の漫画、アニメの発展、そして手塚治虫のこれらに対する貢献を語り、漫画好きの私にとっては興味深く、有意義な内容でした。自分は多少漫画についての知識は人より多いと思っていましたが、松谷さんの講演で初めて知り、そして納得したこともたくさんあり、とても勉強になりました。今日の日本のまんが・アニメの繁栄の裏には、当時社会から相手にされなくて奮起した漫画編集者と漫画家の姿があり、また手塚治虫の存在が漫画・アニメにとってどんなに大きな存在であったかを改めて知り、尊敬の意が心の奥から自然と湧いてきました。そんな講演の後すぐ、先生の仕事場を見学させてもらい、私にはとても堪らないものでした。特に感動したのは、局次長久保田さんの案内で私達は、普段は「開かずの部屋」とされている、手塚先生生前最後の仕事部屋を特別に見学させてもらいました。その部屋をこんな大人数に公開するのは、初めてだそうです。そこには、壁一面の本棚いっぱい、手塚先生の作品がおいてあり、またほかの壁には、先生個人の貴重なコレクションが飾ってありました。例えば、世界で初めて作られたアニメの一枚目の線画など、値段のつけようがないものばかりです。そして部屋のようなすは、先生の生前そのままを維持しているそうです。机には、まだ描いてる途中のラフ画がおいてありました。その横に横たわっているペンはまるで今さっきそこに置かれたようです。私が特に気に入ったのは、いろんな作品のキャラクターが一枚に詰まっているカラー絵。私が大好きなブラックジャックもいました。そんな仕事部屋をじっくり見学した後出てきた私は、もう感動で涙をこらえることができずでした。少し大げさですが、漫画大好きな私にとっては、それぐらいのものだったのです。

幸運なことに、昼食で私は久保田さんの隣に座り、色々お話することができました。漫画やアニメの話だけではなく、人生観のような深いテーマのお話もできて、精神的におなか一杯になってしまい、結局その日の料理の味は全然覚えていません。ただ覚えているのは、「若い内はいっぱい迷ったらいい。迷った挙句、悔いのない選択をすればいいんだよ」という言葉が胸にジーンと響いた感覚です。

午後は大江戸温泉物語で癒しの温泉体験です！会場に入る前、好みの柄の浴衣を選んで着替えしました。浴衣はどれもとても可愛くて、私達女子はとても興奮してしまいました。着替えが終わり中に入ると、そこは江戸時代の風景が！まるでタイムスリップしたようです。色々な屋台風の店が並び、お客さんはみんな浴衣姿でした。みんなでお店を少し回り、庭にでて足湯に浸かったあと、私、しゅりちゃん、王くんの清華組で吉田さんに写真をいっぱい撮って貰い、また4人でプリクラも撮りました。とても楽しかったので時間はあっという間に過ぎてしまい、集合時間が迫っていたので私達は王さんと別れ、三人で温泉を体験しました。私としゅりちゃんは、温泉に浸かりながら吉田さんと日中の「温泉・お風呂文化」の違いの話で盛り上がりました。大江戸温泉では時間が限られていて、あまりゆったりとしていられなかったけれど、体の疲れを取り、心身共に癒され、日本の温泉文化は素晴らしいと改めて思いました。

夜はホテル日航東京の素敵なレストランで大島会長主催の歓迎会。レストランの大きなガラス窓からはお台場の見事な夜景が見え、レインボブリッジのイルミネーションはとても綺麗でした。私達は、大島会長に心暖かく歓迎してもらい、そしてとても親切にお話かけてもらいました。そしてこんな素敵な場所で、私はその日までの感想をみなさんの前でお話させてもらいました。緊張でドキドキしましたが、私の思いはなんとかみなさんに伝わったと思います。日頃は中々日本語でスピーチなどする機会がないので、このような場をもらえたことはすごくありがたく感じました。私にとってはとても貴重な勉

強の機会でした。

食事中は、主に同行してくれた慶応大学の桜井穂子さん（通称まりちゃん）と本のお話をしました。お互いにお気に入りの本を紹介し、まりちゃんは短歌を書くと聞いて、短歌について面白い話を聞きました。また、ワインを注いでくれた外国人のウェイターさんと英語でお話ししたら、スリランカから来たという彼は、ワインに詳しくない私に親切にワインの知識を教えてくださいました。帰り際に、彼は私と握手して、「It's very glad to meet you. (あなたに会えて嬉しかったです。）」と微笑みながら言い、わたしは「Me too. (私もです。）」と心から思い、言いました。

今回の訪日でとても素晴らしいと思えたのは、色々な人々との出会いです。もちろん科学協会の先生たちや、訪日団員のみなさんのように在日中ずっと一緒にいてくれた方との出会いはとてもとても貴重ですが、このウェイターさんや、人力車のバイトさんのような短い出会いもとてもうれしく、素晴らしいものだと思います。平行線だったお互いの人生がある時点で接点ができ、短い交流の中で相手の思い出に足跡を残す。人はこれを経験して、一回しか生きれない人生でも、色々な人生の形の存在を知り、自分は孤独ではない、世界は広いと認識するのだと思います。今回日本での出会いの一つ一つは、キラキラした宝石のようで、私の宝ものになりました。

帰りのバスで、この三日で体験したこと、思ったこと、会った人々を思い出し、とても幸福な気持ちに浸ってました。何度も何度も口癖のように隣に座ってるしゅりちゃんに「本当にたのしいなー」と言い、そして翌日から沖縄に行くこと、訪日はまだまだ始まったばかりと気づき、ワクワクし、一層幸福な気分になりました。

*「チャンプルー」

翌日、私達は朝早くから沖縄に行くため、羽田空港へ向かいました。そこで思わぬサプライズが私達を待っていました。空港で搭乗口に向かって歩いてると、巨大なピカチュウなどポケモンのペイントが施してあるめずらしい飛行機発見！みんなが騒ぎながら通りすぎる前に写真を撮、と撮りながら歩いてると、飛行機はなんと私達の搭乗口につながっていました！ラッキーなことに、私達はその飛行機に乗って沖縄にいきました。機体だけではなく、機内も色々なポケモン要素が含まれていて、みんな大はしゃぎでした。

このように、愉快的な空の旅で沖縄に着き、私達は琉球王国国王の居城・首里城へ向かいました。バスの中では、ガイドさんが沖縄の「チャンプルー」文化について説明してくれました。「チャンプルー」とは、沖縄方言で「混ぜこぜにした」という意味で、ある種の沖縄料理の名前で、同時に、琉球・東南アジア・日本・中国・アメリカの風物が歴史的経緯から入り交じっている沖縄県の文化のことであります。そして首里城は、琉球王国が日本、中国両方とも交流をしていたため、建築に日中両方の文化特徴がみられました。これはなかなか興味深いことです。実際首里城を見学して、確かに中国の古城で見慣れた装飾や模様がよく目に入り、またそれらが伝統的典型的な和風の部屋などもつながっていて、とても不思議に感じました。正殿の王座の上に飾られてる扁額は、四つの、普通の漢字の組み合わせなのに、日本語でも、中国語でも解読不能というような、日本・琉球・中国の文化が融合して作りだす、おもしろく、不思議な文化現象が見られました。残念ながら本物の首里城は戦争で焼失してしまい、私達のは復元されたものでした。城跡の地下には、当時の陸軍司令部の跡が残されていて、足元にあるガラスを通してのぞくことが出来ました。戦争が残した爪痕を見ながら、失われた貴重な歴史建築を思うと、とても残念に感じました。

首里城の見学を終えた後、アウトレット・あしびなーの広場で宜保晴毅市長含む豊見城市のみなさんが歓迎交流会を開いてくれました。沖縄伝統楽器の生演奏、日本舞踊、琉球舞踊など素晴らしいパフォーマンスを披露してもらい、そして「有朋自远方来，不亦乐乎」（朋遠方より来たる有り、また楽しからずや）と歓迎の言葉が書いてある大きな横弾幕に、私達はとても感動しました。私達も私達の思いを表すため、中国でも有名な、沖縄民謡を元にした歌「花」と、日中両国で有名なテレサ・テンの「時の流

れに身を任せ」を合唱しました。事前、先生が出し物を訪日団の団員の中で募集した時に、私は沖縄の歌、「島唄」を歌えたので、応募していました。しかし、本番では、設備の問題で、準備していた伴奏が流せなくなりました。困っていると、前のパフォーマンスで沖縄伝統楽器を演奏した楽団の方が、なんと生伴奏を申し出てくれました！そして、とても光栄なことに、私は沖縄伝統楽器「ジャミセン」の生伴奏の下、「島唄」を舞台上で歌いました。観客には、訪日団員、歓迎会を催してくれた方々以外にも、買い物に来た地元の人々がいて、私の未熟な歌声にも関わらず、拍手をして、暖かい目で見守ってくれました。特に、とあるおじさんが盛大な口笛で、場を必死に盛り上げてくれました。そのおじさんが口笛を吹く姿は、今でもはっきりと私の頭の中に残っていて、思い出すたびに、感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。沖縄で、沖縄の方による、沖縄伝統楽器の生伴奏で沖縄のうた「島唄」を歌えたことは、本当に夢のような経験でした。豊見城市のみなさんがやさしく暖かく私の未熟な歌を受け止めてくれたことは、一生忘れられないでしょう、そして思い出す度に感動するでしょう。最後に私達は豊見城市のみなさんと一緒に「カチャーシー」という踊りを踊りました。歌声と踊りの中で、それぞれ生まれた場所は違くとも、私達は友好の「チャンプルー」を作り出せたと思います。

その夜、ホテルの大浴場で私としゅりちゃんに、自宅の浴室が一時的に使えなくなったため、浴場を利用しに来た、地元のおばあさんが声をかけて来ました。おばあちゃんは、私達が中国から来たと聞いて大変喜び、沖縄では、たくさんの方のご先祖様が中国人で、またみんなそれを誇りに思っている、と言いました。そして、前任の沖縄県知事、仲井真 弘多さんも、ご先祖様が中国人で、とても頭がいいんだよと教えてくれました。おばあさんは、私達にとっても親切に色々な話をしてくれてくれた後、「沖縄を楽しんでいってね。」と帰っていきました。私達は、体だけではなく、心まで温まって眠りにつきました。

* 沖縄をぎゅっと詰め込んだ一日

沖縄の二日は、とても充実した一日でした。朝から沖縄市役所に向かい、沖縄市桑江朝夫市長と交流活動を行い、その後世界遺産にも登録された勝連城に観光にいきました。その日は少し曇っていたものの、天気はよく、景色も雨が降っていた初日より綺麗に見えました。海も、よく写真で見るエメラルドグリーンや、透き通ったブルーで、海中道路を走るバスの両側に広がる景色は私達の心を酔わせるものでした。昼食では、マグロ解体ショーを觀賞し、目の前で下した新鮮なマグロのお刺身を味わうことができました。

午後は、商店街の着物屋で、浴衣体験をしました。おかみさんは着付けがとても上手で、浴衣を着せてもらったほとんど全員の帯の結び方が違って、そしてとても綺麗でした。また、以前から耳にしていた、着付けの複雑さを目の前にして、私達は感服してしまいました。お店に置いてある浴衣がとても可愛かったので、私を含む何人かの女子は浴衣を買い、浴衣を着たまま街に出ました。そこでみなさんは東南植物楽園に行きましたが、暴鳳明先生と曾帥帥さんと私は、訪日団を代表して、FMとよみのラジオ番組のゲストとして出演を招かれていたので、顧先生に連れてもらい、那覇のスタジオに向かいました。

わたしが浴衣姿で街を歩いていると、親切に声をかけてくれる地元の方が途中でたくさんいました。私が成人式に参加すると思ってプレゼントをしてくれようとした方、私達が中国から来たこと知り、とてもうれしそうに歓迎の言葉をくれた方、色々な人に出会い、そしてそのすべての人がとても友好で心優しい方でした。スタジオまでは、少し長い距離を地元のバスで移動しました。私はバスの窓際から沖縄の街並みをずっと眺めていました。街行く人々は、みんな少しのんびりしていて、急ぎ足で慌てて歩く人はあまり見かけませんでした。それが、ふと思い出した東京の出勤光景と鮮烈なコントラストになりました。中国には「慢生活」という言葉があります。それは、都会の急テンポな生活にうんざりした人々が作り出した、急がず、自由気ままな理想の生活状態を表す単語です。その時私が見ていた沖縄の街は、まさに「慢生活」が表れていました。そして、顔にかかる柔らかく暖かな日差しは、ずっと大都会で生きてきた私を、久々に穏やかでとても気持ちいい気分にしてくれました。それは、小さくても確かな「幸

せ」の時間でした。

スタジオに着き、代表取締役の安慶名さんが私達を迎えてくれました。初日にとってもお世話になった照屋さんも、応援に駆け付けてくれました。お互い自己紹介のあと、番組のためのちょっとした打ち合わせが始まりました。私はてっきり、質問も、答えも本番の前に用意するのかと思っていましたが、安慶名さんは私達の基本的な情報を確認し、簡単な問題をいくつか聞いただけで、本番は全く違う質問をすると私達に説明しました。その方が自然だからそうです。私は初めてラジオ番組に出演するので、ぶっつけ本番でちゃんと話せるのか不安で相当緊張してました。でも実際本番が始まると、芸人であるDJさんと安慶名さんはとても上手く話しやすい雰囲気を作ってくれて、私達は無事に収録を終える事ができました。私は心のなかで「さすがプロだなー」と感服しました。沖縄で人生初めてのラジオ出演はとても特別な体験で、また非常に楽しい思い出になりました。

*天災事変

沖縄での最終日、私達はひめゆり平和祈念館を訪れました。

祈念館を見学する前に、私達はひめゆりの塔の前で、ガイドさんから、歴史上そこで起こった惨劇について学びました。その時私はすでにショックでしたが、それは序曲にすぎず、祈念館に入ってから、沖縄線時期ひめゆりの女学生達の惨憺たる状況についてもっと詳しく知ることになりました。まず初めに、私達はひめゆりの生存者が自分の体験を回想し語るドキュメンタリーを見ました。生存者の皆様が語る同窓の目の前の死は、静かな口調であっても、とても生々しく恐ろしいものでした。私は一度足らず、背後にぞくっと感じてしまいました。そして、展示室をまわるにつれ、私の心はどんどん沈んでいきました。すべての展示室を見終え、私ののは悲しみではちきれそうになりました。戦争の残酷さを、知識ではしていましたが、こんなに心で感じたことはありませんでした。でもそんな中、祈念館の中庭にある美しいお花畑は、今日の前にある平和の存在を私に気づかせてくれました。また、館内においてある、ここを訪れた人々が残した感想文集を読んで、平和への思いはちゃんとつながれている、と少し希望を持ってました。

帰りのバスで、通りを挟んで座っている謝さんの目から涙が次々とこぼれ出てました。私はそっとティッシュを渡し、自分の涙をのみこみました。

沖縄を離れ、私達は伊丹空港に着き、人と未来防災センターへ見学へ向かいました。そこで私達は、20年前に起きた阪神・淡路大震災について学び、また3D映像地震体験などで、震災の恐ろしさを知りました。そして同月に四周年を迎える東日本大震災の、まだまだ厳しい被災地の状況を映画で学びました。地震に関する知識をたっぷり勉強した後、私達は被災地 NGO 協働センターを訪れ、村井雅清さんから、防災・減災についての講義を受けました。被災地でのメンタルケアに関する活動は、心理学の学生である私にとってとても興味深い内容でした。

人と未来防災センターの見学後、被災地 NGO 協働センターでの講義、交流という日程の設計は、とても合理的で素晴らしいと思いました。おかげで、たった半日で、震災、防災、減災についての理解が一気に深まり、とても勉強になりました。

*最後の日

3月4日は、主に京都の観光をしました。日本を離れるのは翌日ですが、朝早くから空港に行き帰国するので、実質その日が訪日最後の一日となりました。私達は、清水寺と金閣寺、京都定番の観光地二箇所を午前、午後に分けて訪れました。京都は、まさに「日本」の雰囲気が漂っていて、とても楽しめました。

夕方心齋橋でお買い物を終えた後、私達は歓送会を行いました。歓送会はとてもとても楽しくて、でも翌日に訪れる別れを思うと名残惜しい気持ちになりました。いっそ、時間が止まってしまえばいいの

に…何度もそう思いました。しかし、時間は無情に流れ、最後の夜が訪れまた明けました。

*再見、日本！

とうとう日本を発つ時がやって来ました。私たちはお世話になった科学協会の先生たちに感謝と別れを告げ、帰国しました。

大学に帰る車の中、私達清華大学の三人は、来る時車の中で話した合言葉を思い出しました。「夢と希望さえ忘れてなければ大丈夫」と。でも結局、私達は、夢と希望を持って出かけたのではなく、この一週間の訪日で、夢と希望をたくさん胸に詰めて持ち帰ってきたのです。

最後に、大変お世話になった、科学協会の先生方、団長の劉先生、孫先生、暴先生；貴重なお話を聞かせてくれ、勉強させてもらった尊敬なる人生の大先輩方；一緒に楽しい時間を分かち合った団員のみなさん、まりちゃん、めいちゃん；短い時間でも素晴らしい出会いを私にくれた旅先の方々；ほんとうにありがとうございました！

2. 「笹川杯作文コンクール」訪日団

人民中国雑誌社 事業部 部長 団長 ソン リツセイ 孫 立成



公益財団法人日本科学協会（大島恵美子会長）の招待で、『人民中国』雑誌社、日本科学協会の共催による「笹川杯作文コンクール」と北京大学、日本科学協会が共催した「笹川杯全国大学知識人大会」で受賞した19人が、2月26日から3月5日までの8日間、日本を訪問した。

2月27日午前、日本科学協会は日本財団ビルで中日青年討論会を開催した。日本側実行委員会の慶応大学の学生と中国人学生合わせて43人が6班に分かれ、恋愛、学生生活、習慣、告白など自由な話題から「中日双方の印象を改善するために、いかにして中日双方のプラスエネルギーの情報を伝えるか」といったテーマまで討論した。中日双方の学生は自国、相手国の正確な情報を伝え、理解するための方法を紹介し、それぞれ相手国の文化、社会の理解を深め、ネット情報の偏見を見抜く能力を養い、プラスエネルギーの情報を伝え合うべきだという点で一致した。訪日した一行は日本人学生の案内で、東京の浅草寺、都庁、秋葉原、新宿、お台場や手塚治虫工房などを参観し、現代日本を体験し、特にアニメの歴史に対する理解を深めた。日本人学生の熱心で親切な態度は彼らの心に深い印象を残した。

3月1日、一行は沖縄を訪問し、桑江千朝夫沖縄市長、宜保晴毅豊見城市長はじめ沖縄中国教育文化協会の皆さんから温かく迎えられ、それぞれ交流行事を催し、交流を深めた。駐福岡中国総領事館の丁剣領事も参加した。豊見城市の宜保晴毅市長の主催による歓迎レセプションで、地元の参加者たちは日本舞踊、琉球舞踊、琉球太鼓などを披露して代表団をもてなした。中国の青年たちが中日両国の歌を披露した時には宜保晴毅市長も舞台に上がり、彼らと一緒に歌った。夕べに行われた交流会で、中国の青年たちは現地の文化協会や観光協会、商工会のメンバー、また現地の学生、市民たちとの温かい交流を楽しみ、日本に対する感想などを語った。

沖縄市の桑江朝千夫市長は市役所で訪日団一行と会見した。北京大学の張曉娜先生は日本財団が協賛し、日本科学協会と人民中国雑誌社が共催した日本知識クイズ大会と作文コンクールの情况进行を紹介し、中日青年交流と中日友好関係のために多大なる貢献をされた桑江市長と各界の方々に対して感謝を表明した。中国教育文化協会は東南植物園で中国大学生沖縄訪問交流会を開催し、陸丹鳳会長は中国の青年

たちに美しい和服を用意した。沖縄市の桑江朝千夫市長、中国駐福岡総領事館教育処の丁剣領事、沖縄国際大学の元学長・富川教授、また同校の学生と市民が今回の交流会に参加した。

3日間の滞在中に、那覇市にある中国、日本、沖縄の建築様式が融合された首礼城（スイグスク）や宇流麻市勝連半島の勝連古跡などを観光し、最盛期の琉球王国が中国と政治、経済、貿易面で密接な関係にあったことを理解した。

バヤオ漁港ではマグロの解体を見物し、沖縄料理を楽しんだ。その後、ひめゆり平和祈念資料館を参観し、沖縄戦中に「ひめゆり部隊」に参加し、生き残った謝花澄枝さん（89）の話に耳を傾け、中国人学生は寄せ書き帳に世界平和を願う言葉を残した。また、日本のロックバンド「The Boom」がひめゆりの塔参観後に作った「島唄」に関するエピソードに感動した。

3月3日、一行は神戸に移動し、阪神・淡路大震災の教訓を伝えるために設立された「人と防災未来センター」を訪れ、地震災害と防災に関する資料を熱心に参観した。訪日の終盤日程は京都観光で、清水寺、金閣寺などの歴史的な神社仏閣を見ながら、日本の歴史文化に浸った。参加した19人はそれぞれ、日本の社会・経済、歴史文化、民族情緒を自分の目と耳で味わい、また温泉や和食を楽しみ、同時に、日本の若者の中国理解に対してより深く知り、こもごもに「非常に有意義だった。百聞は一見に如かず」と喜びを語っていた。

主催者側は、青少年の相互理解を深めるには、こうした交流事業を増やし、ひとりでも多くの双方の若者が双方の国を訪問することだ、と話していた。

特別賛助の日本財団、中日交流の促進に貢献して下さった笹川陽平会長、尾形武寿理事長、共催の日本科学協会、同協会の大島美恵子会長、中村健治常務理事、代表団の訪日スケジュールを周到に組んで下さった顧文君さん、宮内孝子さん、吉田玉果さん、沖縄市の桑江朝千夫市長、豊見城市の宜保晴毅市長、中国教育文化協会陸丹鳳会長、そして沖縄国際大学と慶応大学の学生ボランティアより賜った今回の活動に対する多大なる支援と協力に心から感謝の意を表したい。

黄冈師範学院 外国語学院日本語科4年 章 嬌嬌

プリズムジャパン（原文日本語）



笹川杯作文コンクールで受賞したゆえに、日本へ赴くチャンスを与え、八日間の旅を始めた。日本について、さぞ皆さんはもうお馴染みだと思う。私にしてみれば、子供の頃からずっと好奇心を抱いてきた。これは日本語学習の道を選んだ原因かもしれない。長年日本の映画テレビ文化に浸るので、本格的に日本語を勉強し始める前に、すでにそれを手本にいろいろ想像してみた。日本語を専攻にしたあと、日本の文化や風土についてある程度で理解しているつもりで、頭の中で日本のイメージを絶えず修正し続けてきた。そのうえ、日本へ行ってこの目で確かめたいという考えも芽生えた。

東京についたのは雨が降り続く午後だった。雪が溶けてまだ寒いころ、この雨は私たちの熱情を抑えるには少々足りない気がした。ほかに構う余裕もなく、一行は急いでホテルに向かった。東京はよく混雑した町だ。高層ビルが軒を並べ、高架橋がビルとビルの隙間でくねくねと延びている。鉄道と車道が錯綜し、あたかもSF小説の中で描かれた未来都市のように存在している。高速道路を駆け抜け、雨の中の景色を満喫した。国際大都市のもう一つの顔をも知った。翌日、今回訪日活動で一番重要なイベント一日中若者討論会が始まった。会場の雰囲気はそれほど激しくないが、両国若者たちは日中友好問題について素直に意見を述べ、互いの考えを語り合い、結論を出す同時に互いの国への理解をも深めた。話さずにはおけないもう一つは温泉文化の体験だった。ゆかたに着替え、大江戸温泉物語が心を込めて作ってくれた江戸風の街を歩み、まるで何百年前の日本に身を置くような気持ちだった。友人を誘い、思う存分に味わってから温泉に入り、ゆっくりくつろぐ。これ以上の快適さはどこにいるのだろう。

まだ東京の現代化をじっくり味わっていなかったのに、沖縄行きの飛行機にのってさった。バスに乗り換え、山道に沿うように上り、まもなく目的地古琉球王国遺址首里城に到着した。首里城は沖縄諸島にとって大事な古跡で、建築様式が中国唐代、日本本島及び沖縄地元の特色を融合し、神秘的で親切さも欠かさない。この町には、高層ビルがない、眩しいイルミネーションも騒がしいクラクションもない。あるのは、静かさ、和やかさと心の安らぎだけだ。私の故郷によく似ている。小さな町で、賑やかではないが、溢れている人情味が足を止める力を持っている。おもわずここに住んでみたくなった。そして、沖縄市民は町と違って、ホスピタリティーで、まさしく家に帰ったように感じさせた。

沖縄で二日間とまったあと、急いで関西地方に移動した。二十年前ここは大地震の被害に覆われ、二十年後のいま、この土地に立っても震災を受けたとは思わなかった。「人と防災未来センター」で、地震当時の映像を見た。人類の知恵の結晶といえるものたちは子供のおもちゃみたいに脆く、自然の手に翻弄され、たやすく傾倒し、歪み、そして人々の命を奪った。だからこそ、日本の震災後の再建作業に敬服せざるをえない。

もしここまでの旅は日本の現在に触れたのなら、京都の一日は日本の過去をゆっくり楽しめたといっても過言ではない。清水寺と金閣寺はそこに佇み、暗黙のうちに千年の歳月を語る。時間はまるで止まったようで、古めかしさが街中に漂って、行き来の人と交わり、奇妙な光景を編み出した。

月日は瞬く間に過ぎ去ったが、この旅は心に深く焼き付いた。短い八日間だったら、この国とその国民に全面的な認識を得られないが、理解を深めることならできる。日本は一衣帯水の隣邦であり、敵と友両方の役を演じる存在でもある。しかし、人と人の付き合いはそんなに遠慮することではない。友情も、国籍と関係ない。私の目に映る日本は、モダンで伝統的美しさも欠かさない。その国民は秩序を守って礼儀正しいが、熱情もある。それでは、あなたの思う日本はどんな姿でしょうか。

南京郵電大学外国語学院日本語科4年 曾帥帥（原文日本語）



2015年2月26日、私たち笹川杯知識大会・作文コンクール訪日団一行は広大な日本海の上空を飛び越えていた。どこへ行くのか？それは美しい富士山がそびえ立ち、雄大な景色を持っている日本なのだ！

第一駅、現代化大都市—東京

26日午後、東京で小雨が降っていた。空港から出て、私たちはバスに乗った。雨のとぼりで東京の景色がはっきり見えないが、バスが虹橋を通った時、橋のきらきらと輝いていた明かりに驚いた。雨つぶはポツポツと車の窓を叩いて、まるでどこかから漂ってくるセレナーデのように聞こえ、心地よかった。道路の両側のともしびの明々と輝いているビルは広げた腕のように、私たちと抱き合おうとしていた一目に映ったすべては私たちを歓迎しているように見えた。

次の日、ワクワクして、東京の朝日に向かって出発し、中日若者討論会の出席に出かけた。中日若者討論会で私たちは日本の大学生と向かい合って、中日関係を議論し、そして中日関係の発展に関する意見を出しあっていた。新しい時代で育った私たちは扱いの難しい問題を避けなくて、自分の本音を語ると同時に、中日関係の明るい未来を願い、ほんの少しでも力を尽くしたい気持ちを表わした。努力すれば、中日関係はきっと東京タワーに立って眺めた景色のように、広々とした遠景が広がってくるだろう。

初めて日本を体験しているが、私たち訪日団は温かい友情を感じた。特に28日、私たちのために、特別開放された日本有名な漫画家手塚プロダクション新座スタジオを見学した後、さらにその真心に感銘を受けた。たぶんこれは人と人、人と文化の奇妙な磁場だろうか。この磁場のおかげで、私たちは国境と時間を超え、日本に集まってきて、お互いの心を感じる同時に、相手への理解も深くなった。

第二駅、民族的なところ—沖縄

沖縄に着き、初めて見たのは首里城である。首里城の正殿は西の方を向く。その原因の一つは首里城の北と南に山があり、風向きは東西で通るからだ、もう一つは中国は沖縄の西にあり、敬意を表すためだ。たぶん中国と関係が緊密であるためだろうか、私たちも沖縄にもっと親しみを感じた。

この親近感を持って、私たちは民族的な琉球踊りを見て、市民と一緒に歌を歌ったり、カチャーシーも踊ったりして、とても楽しかった。あの時、皆さんの心から快活に笑った様子は沖縄の特別な景色として、訪日団の皆の心に永遠に残っていると思う。

沖縄ときたら、海的美しさを褒めなければならない。世界遺産である勝連城に登り、広大な海を一望におさめた。こんなに大きく深い海よ、きっといろいろな物語があるだろう。

楽しい時を過ごす同時に、重苦しい昔も心に留めて忘れられない。3月3日、私たち訪日団は「ひめゆり平和祈念館」を見学した。そこで、私たちは第二次世界大戦で犠牲した沖縄師範学校女子部の資料を見た。生還者たちは痛みと悲しみをこめて、以前のクラスメートを懐かしんでいた。多くの訪日団員はビデオを見ながら、泣いていた。私たちは若くて、本当の戦争を知らないが、2戦中、苦難を受けた中国の歴史もあるため、その痛みもわかる。だからこそ、私たちは平和を大切にして、生命を尊敬しているのだ。

日本への理解を深めるにしたがって、私たちの心も通じるようになった。しかも、平和のために、自分の力を貢献したいと思うようになる。では、人の力はどれぐらいあるのか？日本の次の駅はこの質問に答えてくれた。

第三駅、災難から奮い立つ—神戸

1995年1月17日、神戸近海で阪神淡路大地震が起こった。死者人数は4571人で、大きな災害であった。しかし、神戸の人々は落ち込んでいなくて、皆が気持ちを一つにして、大きな力となり、ついに、町を再建に成功した。

神戸は人の力の強さを見せ、貴重な防震経験を提供してくれた。私たち何人かの力は限りがあるが、中日両国ともに学びあい、ともに進歩すれば、限りのない可能性が作れると思う。

希望と祈念を持って、私たちは最後の駅へ向かった。

第四駅、伝統的な美—京都

京都で私たちは清水寺と金閣寺を見学した。

清水寺は静かで典雅であり、金閣寺は広くて立派である。清水寺で御手洗をして、その水面で私たちの笑顔を映し、日本への祝福を残した。金閣寺でコインを投げ、中日友好を代々受け継ぐように、と願った。

名残おしくて離れたくないが、日本での旅は終わった。8日間の訪日は短い、受けた感動と築かれた友情は長く続けるものだと思う。これから、私たちは中国の大地で中日友好の種を撒き、その種は平和を愛する人々に育てられれば、中日友好の苗はすくすくと成長してゆき、花が咲くと私は堅く信じている。